「あきたの英語 指導事例集」

"Resources for English Education in Akita"

令和5年3月

秋田県教育委員会

はしがき

今日の複雑化するグローバル社会において、国際共通語としての英語の重要性はこれまで以上に高まっています。「聞く」、「読む」、「話す」、「書く」のバランスのとれた英語コミュニケーション能力の育成は、ふるさと秋田や日本の魅力を広く世界に発信するだけでなく、多様な背景をもった人々と協働し、新たな価値を創造したり、世界の諸課題を解決したりする力の育成につながっていくと考えます。

本県では、平成30年度から令和4年度にかけて「AKITA英語コミュニケーション能力強化事業」において、「授業改善」、「教員研修」、「異文化体験」、「グローバルリーダー育成」の四つを柱として、国際感覚や世界的視野を身に付け、グローバル社会で活躍できる人材の育成を目指した英語教育を推進してまいりました。様々な事業において関係各所よりご協力をいただいており、その結果、児童生徒の言語活動量の増加、生徒の英語力向上、先生方の授業力向上など大きな成果を得ております。

平成28年12月の中央教育審議会答申を踏まえ学習指導要領が改訂され、小学校では令和2年度、中学校では令和3年度から全面実施となり、高等学校でも令和4年度から年次進行でスタートしました。外国語教育においては、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力の育成を目指し、各学校段階の学びを接続させるとともに、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にした授業改善と学習活動の充実等が求められています。県内の先生方におかれましては、新たな時代に求められる英語教育推進のため、日々授業改善に取り組んでいただいていることに心より敬意を表します。

本指導事例集作成に当たり、県内小・中・高の外国語(英語)担当教員及びALT各5名の合計20名の先生方から、優れた指導事例を紹介していただきました。これらの実践は秋田県英語教育の貴重な財産です。この財産が校種の枠を越えて広く共有され、秋田の英語教育の更なる発展に結び付くことを期待しております。積極的に本事例集をご活用いただければ幸いです。

最後になりますが、事例提供に快く御協力いただいた皆様に改めて感謝申し 上げます。

令和5年3月

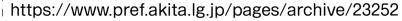
目 次

はしがき

小	学	校
例	1	『「藤里
事例	2	『自分
例	3	『進ん
酠	4	『会話
事例	5	『児童
<u> </u>	学	校
例	6	『主体
鄆	7	『学習
: / : ::l	0	『おみぶ
₹19 IJ	ŏ	『教科
例	9	『主体
נעוי	J	□ <u> </u>
事例 1	0	『社会

高等学校 事例11 『英語授業の小技』 秋田高等学校 教諭 伊藤 愛梨 · · · · · · · · · 31 事例12 『英語授業におけるディベートの活用と評価の工夫 ~思考力と表現力の向上を目指して~』 本莊高等学校 教諭 三浦 瑞穂 事例13 『英語で地域の魅力を発信できる生徒の育成 ~学校独自の英語学習テキスト Welcome to Nikaho を用いて~』 教諭 畠山 陽子 ………37 仁賀保高等学校 『発信力や表現力を伸ばす指導法について』 事例14 角館高等学校 教諭 大塚 繁太郎 ・・・・・・・・・・・・・・ 40 事例15 『授業の中でのディベート活動の実践 ~論理的な構成で意見を伝える生徒の育成を目指して~』 教諭 菅原 透 ………43 湯沢高等学校 外国語指導助手 事例16 『Find Your Partner Activity』 男 鹿 市 教 育 委 員 会 外国語指導助手 Kaixin Chin ······ 46 事例17 『How to Teach Classroom Debate』 仙北市教育委員会 外国語指導助手 Mark Wiles ···········49 事例18 [Situational Responses] 大館鳳鳴高等学校 外国語指導助手 Glenn Timoney ······· 52 **Collaborative Document Activity** 事例19 横手清陵学院高等学校 外国語指導助手 Marie Emmanuelle Licup · · · · · 55 事例20 [Journey Through America] 湯 沢 翔 北 高 等 学 校 外国語指導助手 Stephen Beasy · · · · · · · · · 58 高校版学習指導案例

」 本指導事例集は、「美の国あきた」HP からもご覧いただけます。縮小された資 ↓ 料も HP では元のサイズでご覧いただけるほか、実践例で紹介したワークシート ↓ 等もご覧いただけます。ぜひご活用ください。HP の URL は以下のとおりです。↓ 右記QRコードからもアクセスいただけます。





「藤里町の外国語教育」~小学校外国語活動の実践を通して~

藤里町立藤里小学校 教諭 庄司 俊哉

1. はじめに

藤里町では、藤里小学校と藤里中学校を 再編し、令和5年度に義務教育学校として 開校する。それに向けて、町独自の教育と して外国語教育とふるさと教育を掲げ、平 成30年度より小中一貫教育推進委員会を立 ち上げ取り組んできた。

外国語教育においては、平成30年度より 小学校新学習指導要領の内容を先行実施 し、小学校低学年の外国語活動(年10時 間程度) にも取り組んできた。町教委で は、小・中学校における外国語教育を補完 する取組として、令和2年度から町営英語 塾を開設している。講師となる国際交流員 (CIR) を民間の会社に委託し、英検等の 指導とともに、幼稚園児との交流や小・中 学校の授業にも派遣し、外国語教育の環境 整備に努めてきた。藤里小学校では、すべ ての学年での外国語教育を英語専科とALT またはCIRのティーム・ティーチングで行 っている。令和3年度からは中学校英語教 員を小中兼任として、小学校5、6年生の 指導は、中学校英語教員が行ってきた。

義務教育学校の外国語教育として、9年間の系統的な指導を行うことを基本方針としている。具体的には、①9年間の専科教員による指導、②音声から文字の指導への円滑な接続、③前期・後期課程のギャップの少ない授業時数、④英語塾と英検受検補助事業である。もう一方の柱である町独自のふるさと教育と連携させ、将来藤里町を支え、英語で藤里町を発信できる人材を育てることを目標としている。

令和2年度より、藤里小学校は、秋田県 英語教育改善プラン推進事業 拠点校・協 力校英語授業改善事業の拠点校として研究 を進めてきた。令和3年度は「同じステージに立たせ、他者とのつながりを通してステップアップさせる指導方法の工夫」の研究主題のもと実践を重ねてきた。本稿では、外国語活動の実践を中心に紹介することとする。

2. 小学校3年生での実践

令和3年11月19日に公開授業研究会を行った。この日は、第3学年のUnit 6「ALPHABET」の4時間目を扱った。本単元は、「聞くこと」ウと「話すこと [やり取り]」アを関連する領域別目標とした。アルファベットの文字を題材とする初めての単元ということもあり、児童がアルファベットの文字に親しみをもつとともに、興味をもって学習に取り組むことができるように、頭文字をテーマにした学習活動の展開を考えた。そのため、本時のねらいを「頭文字の入ったお誕生日カレンダーを作るために、自分の姓名の頭文字を伝えることができる」とした。

本時では、自分の頭文字を伝える「My initials are 〇〇.」という表現への慣れ親しみをねらい、友だちから自分の頭文字のアルファベットカードをもらう活動を設定した。本時のねらいには、「やり取りをする」という視点もあり、お互いの頭文字を尋ね合う必要性があることにも気付かせ、その際に使える表現がないかを考えさせた。児童からは「Whatが使えるんじゃないか」という考えが出され、尋ね合う活動へとつなげていった。外国語の時間は、その単元で学ぶターゲットセンテンスのみの学習でなく、いかに今まで慣れ親しんだ表現を使って伝え合うかということが大事であ

ると考えているので、普段からできるだけ このような学習の展開を心がけている。教 師や友だちとのやり取りを通してお誕生日 カレンダーを仕上げることができた。

3. 小学校4年生での実践

令和3年7月9日には、第4学年で授業研究会を行った。この日は、Unit3「I like Mondays.」の4時間目を行った。本単元は「聞くこと」アと「話すこと [やり取り]」イを関連する領域別目標として扱っている。本題材は、児童にとって身近な「曜日」である。児童の日常生活と曜日を関連付けながら、伝え合うことの必要性をもたせるとともに、基本的な表現に慣れ親しませたいと考え、授業を構想した。

本時のゴールを「友だちと好きな曜日をたずねたり答えたりしよう」と設定し、活動をした。児童は、ペアになって「I like 〇〇. Do you like 〇〇?」「Yes, I do. / No, I don't.」というやり取りをしていた。更に活動を発展させたいと考え、どのようなやり取りをしたいか児童に考えさせたところ「もっと会話をつなげたい」とか「Do you like~?から始まる話し方だと、YesかNoしかない」という意見が出され、「What」を使った尋ね方ができないかという結論に至った。児童は過去の学びの中から「What~do you like?」という表現を導き出し、その後のやり取りにつなげることができていた。

本時の学習を通して、児童にはそれまで に学習した表現を使えば、やり取りの幅が より広がっていくということを実感させる ことができた。

4. 授業構想の際に気を付けていること

(1) 児童を同じステージに立たせる 外国語には「難しそう」というイメージ が強い。そこで、「見通しのもてる安心 感ある授業づくり」を心がけている。授業 は「導入部」「展開部」「終末部」の3部 構成を心がけている。「導入部」はゴール の設定と自身の経験を結び付ける場、「展 開部」は外国語を使ってやり取りをしたり、 他者との関わりによって学びを広げたり深 めたりする場、「終末部」は学びを振り返 り、次につなげる場としている。

また、ゴールの設定をするときも、教師側から一方的に与えるのではなく、「このUnitでどんなことができるようになりたいか」を児童に問うことで、児童の意見を取り入れながら設定している。自分たちで考えたゴールに向かうために、どのような活動をしていったら良いかを考えながら学習に取り組むことができ、主体的な学習者を育成することにつながっている。

(2) 英語発話量の充実

授業において英語発話量の充実を図るためCIRとのSmall Talkを全学級で実施している。導入は必ずGreetings, Day, Date, Weatherについて児童とやり取りをすることから始めている。初めのうちは、何を言っているのか分からない児童も、CIRやJTEがジェスチャー等で表現することを通して、何を言っているかを理解するようになってきている。

児童が英語に慣れ親しみ、たくさん話すことができるようにするためには、英語を聞く機会の確保が大事だと考えている。そこで、JTEも不慣れではあるがオールイングリッシュの授業を心がけるようにしている。その際も、難しい表現を使って指示を出しても児童には伝わらないので、伝わることを最優先に考えている。

授業を効果的に進めるためには、CIRと の打ち合わせも重要である。そのため、毎 時間略案を作成し、CIRと、その時間のねらいは何かということと、児童に合った指示の出し方等について打ち合わせをしてから、授業に臨んでいる。CIRとのTTで常に心がけていることは、授業のコーディネートはJTEが行うということである。児童一人一人に合った指導の仕方、表現の在り方、本時のねらいに沿った学習活動の展開を組み立てているのはJTEなので、CIRに任せきりにしないことが大切である。

5. まとめ

最後に、2年間の実践を通しての成果と課題 を挙げる。

「成果」

(1) 英語好きの児童の増加

ゴールの設定を児童と一緒にすることで、 見通しをもった学習を展開させることが できた。また、自分たちの意見が反映され たゴールの姿に向かって学習を進めるなど、 主体的に学習に取り組もうとする児童の姿 が多く見られるようになった。

(2) 表現の広がりや深まり

児童が書いた学習の振り返りや、既習事項をフィードバックさせる時間を意図的に取り入れたところ、今まで慣れ親しんできた表現を積極的に取り入れて、一語一語のやり取りではなく、一文以上のやり取りを楽しむ姿が見られるようになった。

(3) 英語に慣れ親しむ児童

教師が、間違っても英語で指示を出したり、使ったりする姿勢を見せることで、間違うことを恐れることなく、とにかく使ってみようと意識する児童が多くなった。また、低学年時から、CIRの英語に触れることで、児童の耳が育ち、英語に対するリスニング力も高まっている。

[課題]

(1) ついつい使ってしまう日本語

ゴールにたどり着くためには、活動につなげないといけないという意識が強くなりがちで、指示が伝わるかどうか不安に駆られるときは、どうしても日本語を使って指示を出してしまいがちになる。児童が外国語に触れる時間は、外国語の時間しかないという意識をもって、オールイングリッシュの授業を心がけたい。

(2) 正しさよりも、やり取りの楽しさ

児童のやり取りの様子から、間違いを訂正したり、正しい言い方の練習をしたりすることが多かったが、外国語の基礎的・基本的力の捉え方が間違っていたと感じた。習った表現を正しく使うことが小学校の外国語活動で求められていることではなく、英語を使って楽しんでやり取りすることを念頭に置いた指導を心がけていきたい。

(3) 学習状況の見取りの難しさ

児童の発話量を確保した学習の展開を考えたときに、一人一人を見取れないことも度々あった。児童の活動の様子を後で見取ることができるようにICT機器等の活用も考えられるので、どのようにすればより確かに児童の活動を見取ることができるのか検証を重ねていきたい。また学習計画を立てる際に「記録に残す評価」「指導に生かす評価」とその評価場面を意識していきたい。

自分の力で相手に伝わるスピーチを

秋田市立桜小学校 教諭 吉川 庸子

1. はじめに

本校は令和2年度から外国語専科が配置され、5、6年生の外国語科の授業を行っている。今年度は、3、4年生の外国語活動も専科担当の学級があるため、3年生から6年生までの外国語学習における発達段階を肌で感じることができる。小学校での外国語教育が本格実施されてから3年、子どもたちの英語に対する抵抗は下がり、能力は年々向上しているように感じる。そうした子どもたちの姿を、6年生の「Unit 3 Let's go to Italy.」を通して紹介する。

2. 活動の実際

単元名 Unit 3 Let's go to Italy. 学 年 6年生

単	単元の学習計画				
時	学習内容				
1	ALTの国紹介を聞く				
2	おすすめの国について調べる				
3	おすすめの国のスピーチを考える				
4	おすすめの国のポスターを作る				
5	おすすめの国の中間発表をする				
6	アドバイスを基に発表を改善する				
7	おすすめの国について紹介する				
8	他グループにコメントをする				



〈ALT による国紹介〉

(1) 様々な国との出会いとインプット(第1時)

単元の導入では、ALTが実際に旅行した国々をパワーポイントで紹介した。母国であるアイルランドを始め、オーストリアやブルガリアなど、子どもたちになじみのない国々もある。他国の美しい景色や美味しそうな食べ物についての説明を、子どもたちは興味津々で見て、聞いて、考えている。紹介には、本単元で扱う"You can see/eat/enjoy~"を中心に、"It's~"や"My favorite ○○ is~."など、既習表現も盛り込まれている。いくつもの国紹介を聞いているうちに、子どもたちは自然と英語表現をインプットしていく。

国紹介を聞いた後、行ってみたいと思った国を1つ選び、その理由を全体で共有した。「ジェラートを食べたい」「風車を見てみたい」「買い物を楽しみたい」など、様々な意見が出た。それらの言葉を英語にできないか問うと、「食べるはeatだ!」「見るはsee!」「楽しむはenjoyだ!」と次々と既習表現が出てきた。すると子どもたちは、「あれ?知っている言葉ばかりだ。」「簡単だ、自分にもできそう!」と、国紹介の発表に前向きな気持ちを抱いていた。

Do you know this flag? This is Switzerland. You can go to Lake Geneva.

Frankenstein is from Lake Geneva.

You can eat Swiss cheese and chocolate.

It's very delicious!

最後に、自分が紹介したい国をPicture Dictionaryから選んでもらった。例年はアメリカやフランス、ブラジルなど、子どもたちになじみのある国に希望が偏る。しかし、今回はドイツやガーナ、モロッコやスウェーデンなど、調べたい国の幅が広がった。恐らく、今年度のALTの出身国がなじみのなかったアイルランドであることや、紹介された国が多岐にわたったことにより、子どもたちの興味の幅が広がったためではないかと考えている。

(2) 「伝えたい」気持ちと「わからない」の自覚と「言える!」自信(第2・3時)

2時間目は、司書の先生に用意してもらった各国の観光ガイドブックを使い、担当の国について調べた。「観る・食べる・楽しむ」に分かれているため調べやすく、魅力的な写真もたくさん載っている。始めにガイドブックでその国について概観し、詳しく調べたいものについてはタブレットを使用してもよいこととした。子どもたちは調べていくうちに担当の国の魅力をどんどん見付け、「どれにしよう。これも良いし、これも面白い!」と、発表する内容に悩み、「伝えたい!」という気持ちを育てている。



〈グループで調べる様子〉

3時間目は、前時に調べた内容を英語で伝え合う活動を行った。チャンツで言い慣れてきた "You can see/eat ~." の表現を基に、調べた内容をお互いに英語で言ってみた。すると「○○って何て言うんだ?」と、「わからない」を自覚した声が聞こえてくる。子どもたちが言いたいことについて、いくつか質問を取り上げる。例えば、「海中散歩ができる」は何と言うか質問があった。子どもたちに、「海中散歩という言葉は難しい。1年生に説明するとしたら、何て言う?」と尋ねると、「海の中を歩く」という言い換えが出てきた。それなら、"You can walk in the sea."と言える。このようなやり取りをいくつか繰り返すと、「自分の知っている英語で言えるんだ!」と子どもたちは思い始める。全ての質問に答えなくとも、考え方がわかった子どもたちは、「自分でできそう!」という気持ちになっている。友達と何度か伝え合っているうちに「言える!」自信が付き、"It's fun!"など、説明を少しずつ付け足していた。

(3) 相手に伝わるスピーチにするために(第4・5・6時)

4時間目は、コラボノートでポスター作成をした。 コラボノートの利点は、メンバー全員が一斉にポスター上の作業ができること、写真を簡単に載せられること、修正が簡単なこと、各グループの進捗状況の確認が簡単なことだと感じた。英語を「書く」だけではなく「打ち込む」ことに慣れるのも利点の1つかも知れない。例年は手書きで、じっくり見て書く良さもあったが、時間がかかり、英語の音声に触れる時間が削られていた。また、ポスター作成の際は、相手は地名や食べ物など初めて聞く言葉が多いこと、発表の際に聞



〈コラボノートで作成したポスター〉

いている人たちの理解の補助になることを意識するよう促した。

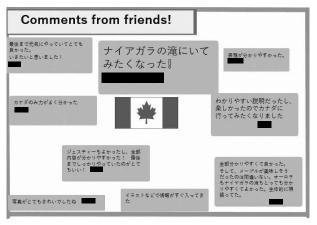
5時間目は、2グループずつのペアになり、互いの発表を見合った。その際、発表する側はタブレットでポスターを見せながら、聞く側は録画しながら行った。聞く側は発表を聞いた後、発表の仕方や内容についてアドバイスする。理解できなかったものは「わからない」とはっきり言ってもらう。すると、子どもたちは言い換えたり、指さしやジェスチャー、説明を付け足したり、ポスターを修正したりしていた。また、録画した動画を見て「下ばかり向いている」「ゆらゆらしている」「思ったより声が小さい!」など、自分の姿を客観的に見て、気付いた点を自主的に改善しようとしていた。



〈お互いの発表を録画する様子〉

6時間目は、前時の反省を生かして自分たちの発表を改善していく。その過程で、英語表現で困ったときはJTEやALTに声を掛ける。最後にJTEやALTに見せることで、本番に向けてさらに自信を付けていた。

(4) 友達を通して世界を知る(第7・8時)



〈コラボノートの付箋機能でのコメント〉

7時間目は、国紹介の発表を行った。他のグループがどんな発表をするのか、子どもたちもわくわくしている。発表は、ミスやエラーもあるが、前時のアドバイスを基に「行きたい!と思ってもらえるように伝える」ための工夫がされている。

8時間目は、コラボノートの付箋機能で、他グループにコメントした。発表の仕方や内容を褒められるだけでなく、「行ってみたい!」というコメントに、子どもたちは喜びを感じていた。ある子どもの最後の振り返りに、「私はあまり外国に行きたいと

思わないので考えたことがなかったけど、外国にはきれいな景色や不思議な食べ物があると知ったときは、少し行ってみたいなと思った」とあった。子どもたちが発表を見合い、相手の気持ちを動かすことができたということは、「相手に伝わった」という何よりの自信になるのではないだろうか。

3. おわりに(成果と課題)

これまで言語活動を中心に学習を進めてきた成果として、子どもたちは「決まったものを言って終わり」ではなく、基本の表現をもとにどう伝えたらよいか自分で考え、相手の様子を見ながら反復したり付け足したりしながら話せるようになってきている。その一方で、英語の正確性が疎かになっている様子も見受けられる。

今後の課題として、自由度と正確性のバランスをとること、伝える内容を充実させながら英語に触れる時間も十分に確保することが挙げられる。「伝えたい!」という気持ちを育みながら、こうした課題と向き合って実践を積み重ねていきたい。

進んでコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成

~英語による言語活動の充実を目指して~

由利本荘市立鶴舞小学校 教育専門監 佐々木 真智子 秋田市立金足西小学校 教諭 奈良 璃菜

1. はじめに

由利本荘市では、令和元年度から「拠点校・協力校英語授業改善事業」を通して県内大学等と効果的に連携して、外国語活動・外国語(英語)担当教員の指導力及び英語力の向上を図るとともに、モデルとなる実践事例を県内の他校に提供することにより、当該校の成果の普及を図ってきた。令和3年度は、鶴舞小学校と本荘南中学校が拠点校として研究を進めた。

鶴舞小学校では、研究の重点として、次の二つに取り組むこととした。

- ① 学びのつながりを考えた単元の構想
- ② 『見方・考え方』を働かせる学び合い

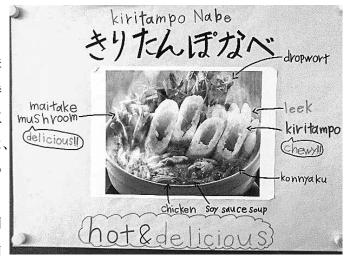
「外国語の面白さや豊かさなどに気付き、進んでコミュニケーションを図ろうとする子どもの育成」という外国語活動・外国語の研究主題のもと、研究の重点を具体化させて取り組んだ。

2. 具体的な取組と工夫

(1) 「学びのつながりを考えた単元の構想」について

「学びのつながりを考えた単元の構想」を実現するために、二つの側面から研究を進めた。一つ目は、「教科横断的な単元構想」である。学級活動や総合的な学習の時間、各教科など、児童が学習したことを取り入れた単元構想を目指した。6年生では、家庭科「くふうしよう おいしい食事」の単元で、「1食分のこんだて」を考えたり調理の仕方を学んだりした。その学習と関連付け、今回紹介する研究授業では、「由利本荘市に新しく来たALTにおすすめの

料理を伝えようしという学習課題を設定した。



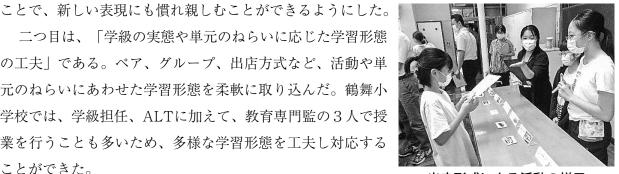
おすすめの料理のポスター

二つ目は、「自分の考えや気持ちなどを伝え合う言語活動の設定」である。5年生では、総合的な学習の時間に「地域の伝統や文化について学ぼう」という学習を行った。自分が興味をもって調べた県の名産品を外国語の学習にも取り入れて単元計画を立てた。家庭科で小物作りを行った際には、「家族にプレゼントしたい」という声が児童から多く聞かれたので、外国語でも「家族へのお土産を購入する」という場面設定を行い、児童の実態をもとに、相手意識や目的意識をもって活動に取り組めるよう工夫した。

(2) 「『見方・考え方』を働かせる学び合い |

「『見方・考え方』を働かせる学び合い」では次の三つを具体的取組として研究を進めた。一 つ目は「All Englishの授業によるInputの充実」である。授業の導入では、毎時間、本時のゴー ルが見通せるようなSmall Talkを行った。Small Talkでは、既習の表現をたくさん取り入れたり、 児童を巻き込んで行ったりするように心がけた。インプットやインテイクの時間を十分に確保する

二つ目は、「学級の実態や単元のねらいに応じた学習形態 の工夫」である。ペア、グループ、出店方式など、活動や単 元のねらいにあわせた学習形態を柔軟に取り込んだ。鶴舞小 学校では、学級担任、ALTに加えて、教育専門監の3人で授 業を行うことも多いため、多様な学習形態を工夫し対応する ことができた。



出店形式による活動の様子

三つ目は、「提示やくり返しによる既習事項の活用」であ

る。英語を話すことに苦手意識をもっている子どもも少なくないため、既習事項については単元 を通して振り返る場面を設けたり、これまで学習した単語についてはいつでも思い出すことがで きるよう教室に掲示したりして、児童が安心して学習を進められるようにした。

これらの取組と工夫の集大成として、公開研究会を行った。以下に、当日の指導案を載せる。

3. 本時の指導案(ねらい~学習過程)

(1) ねらい

- ・紹介したい料理について、おすすめの理由を話したり、ALTからの質問に答えたりしながら、そ の魅力を伝えることができる。 (思考力・判断力・表現力等)
- ・紹介したい料理について、おすすめの理由を話したり、ALTからの質問に答えたりしながら、そ の魅力を伝えようとする。 (学びに向かう力、人間性等)

(2) 学習過程

過程	主な活動と児童の動き	指導者の活動・支援と評価			
(分)	土な伯動と允里の動き	HRT	○ALT ・教育専門監		
挨 拶 (3)	1 Greeting	○児童と一緒に元気に挨拶す る。	○楽しい雰囲気をつくるため に、明るく挨拶をする。		
導 入 (5)	2 Today's goalの確認 おすすめポイントが伝わ るように、選んだ料理を紹 介しよう。	○HRTのおすすめの一品につ いてALTとSmall Talkをす る。	○HRTとSmall Talkを行う。 ・児童の手本となるように反 応しながら聞く。		

展開 (31)	3 Activity 1.練習する。 2. 1回目の紹介をする。 (例) S:Please look at this. Do you know this food? A:No. What's this? S:It's kiritampo nabe. It's a very popular hot pot dish in Akita. A:I see. What's kiritampo? S:This is kiritampo. It's a rice stick. Grilled rice. Do you eat rice? A:Yes, I like rice. S:We have good rice in Akita. You can eat delicious kiritampo. My family likes kiritampo nabe. Soup is delicious. Chicken and vegetables are good combination. A:Great! 3. 2回目の紹介をする。	したり、ALTからの質問の魅力を伝えている。(【主体的に学習に取り組	観察・振り返り) む態度】 て、おすすめの理由を話 に答えたりしながら、そ
振り返り(5)	4 Review of today's class ○「振り返りカード」を 書く。	○「おすすめポイントが伝わるように工夫したこと」や、 「紹介の仕方のよかったところ」など、振り返りの視点を明確にする。	○児童のがんばりややり取り のよかった点を称揚する。
挨 拶 (1)	5 End of Class	○満足感をもって終えられる ように、がんばりを称揚する。	

4. 成果と課題

児童の思いを生かした単元構想を工夫し、話したくなる内容や興味のある内容を取り上げたり、学習形態を工夫したりすることで、学習への意欲が高まり、進んでコミュニケーションを図ろうとする児童の割合が増加した。また、教育専門監による校内研修会を設けたことも効果的な試みであった。クラスで行うSmall Talkの方法などの研修を受け、単元や授業の導入での教師の英語の発話量が増えた。このことも、児童の英語の発話量が増えたことにつながったと考えている。既習の表現に何度も触れたり、児童が英語で言いたい表現を取り上げたりすることで、既習事項を活用しようとする姿も見られるようになった。小3のアンケート結果では、5月に比べてその意識が24%向上した。こうした積み重ねを継続して行っていくことで、一層児童の英語による言語活動は充実していくことが予想される。

課題としては、児童のパフォーマンスをよりよくしていくために中間評価を生かした後半部分の展開を充実させていく手立ての必要性が挙げられる。児童の実態に応じた見取り、ねらいに追るための効果的な中間評価の在り方の研究を今後も継続していきたい。

会話を重視し、発話量の多い授業を目指して

~疑問詞を使った会話の充実~

大仙市立南外小学校 教諭 梅川 徹

1. はじめに

この実践例は、英語授業改善事業の拠点校に指定されていた美郷町立仙南小学校で、令和2年度 に行った授業をもとにしている。

外国語科の授業には、専科の教師(梅川)に加え、ALTもしくは英語学習支援員(高橋かがり先 生)が入り、常に2人体制で授業を行っていた。2人体制なので、その時間のゴールもデモンスト レーションで示すことができる。ゴールをデモンストレーションで示すことで、具体的にイメージ させたり見通しを持たせたりすることができるだけでなく、説明を省くことができて、オールイン グリッシュの授業が成立しやすくなる。

2. 実践内容

(1) 単元について

取り扱った単元はNew Horizon Elementary 6のUnit 2 How is your school life?である。この単 元は日常生活や宝物について伝え合ったり話したりする構成になっているが、実践するにあたり、 単元名をWhat is your treasure?とし、ゴールを宝物の紹介を中心としたやり取りに変更した。自 分の宝物を扱うことで、児童は話したい内容を具体的に想像でき、意欲的に学習に取り組むことが できると考えたからである。

2	non	学習活動/表現・会話例	教師の主な文様	# 価
1	・無罪の子どもたち が大切にしているも のについて、新のおお よその内容を理解す ることができる。	- 受募人物が大切にしている物 や、その理由についての話を聞い たり動画を見たりする。 Me treasure is ~ 1 like~	・大切にしている理 由について理解させ らために、写真や映像 にも注意するように 助賞する。	・世界の子どもたちが大型 にしているものについて、 おおよその内容を理解して いる。 [64]
2	・世界の子どもたち の生活の様子につい て、おおよその内容を 機能することができ る。	- 大切にしている物と生活の様子 とを関連付けながら話を聞いた ち、動画を見たりする。 My breaure is ~ . 1 like~. I can~	- 質易の子どもたち の宝物には、生活に欠 かせない物が含まれ ていることに気付く 上うに、日本の生品と 此べる。	・世界の子どもたちの生き の様子を知るために、自分 たちの暮らしと比べながら 内容を捉えようとしてい る。 [報]
3	+ 日常生間の日間に ついで考ね合うこと ができる。	- 日常生涯の日間について母む合う。 What de you usually de on Sundays? I usually watch soccer games on Sundays. Clean my roum, walk my dog, play baseball, de my homework My treasure is ~ . I like~.	・日理や相反を表す 語句と のめに、We Cast で活用したフラッシュ カードやチャンプを 附置する。	・日東や報復を表す部的や 直現を開催している。 「日本」 ・百分のことを伝え、相手に ことをよく知るために、「 要生活の画面について毎日 育っている。 【巻】
4	・宝物は何か毎お合うことができる。	I can ~ 1 usually ~ . - 実際に行うの表はたり、新年見せ だがら等えたりする。 What is poor treasure? My freasure is ~ . I like ~ . I can ~ . I usually ~ . I want to ~ .	・室幹が何か接り返 し毎ね合うことがで さるように、チャンツ ヤゲームを適用する。	・室物は何か尋ねたり答。 たりする実現を身に付けて いる。 【加】
5	・自分の定物につい で仮え合うことがで きる。	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	・様々な質問に答え られるように、ベアで 質問を考えるように 助さする。	・類単な語句や表現を用いて、宣物が何か伝え合っ。 いる。 [形]
6 (本時)	・自分令変達の宣称 について、深く得ね合 うことができる。	- グループで自分の宣称について 最更し、質問したり答えたりして 転え合う。 What is your treasure? My treasure is ~ 1 like~、 What, Who, When, Whyse, Why.	・総介する人は無償 にするよう助言し、質 様する人は疾害の疑 問詞を活用するよう 助言する。	・宣物に対する心情や背景を伝えたり知ったりするだめ を伝えたり知ったりするだめに、簡単な語句や表現も 用いて尋ねたり答えたりしている。 (形)
7	・便事の人々が何を 大切にしているかを 知り、生信の様子につ いて理解を踏めるこ とができる。	・世界の人々が大切にしている物から、生活の様子の違いについて考える。(先生テャレンジ)	・自分たちの生活に 欠かせないものにつ いて考えさせたり組 介させたりする。	・世界の生活に対する理象 を認めるために、自分の引 値に欠かせないものについ で悩え合おうとしている。 【他】
8	・日本語と美勢の主 語のあつかいの違い について理解を深め ることができる。	- 日本語と英語を比べたり、映像 を見て外間の空活の様子につい で理解を積めたりする。 I'm house、I'm hungry. I ram help you.	・日本路は主路がな くても通じる場合が あるが、英語には原位 的に主路が必要なこ とに気付くような例 を示す。	・外国の生活の様子を見て 放男と日本の首題や文化・ の理解を描めている。 【知】

本等の実際 (本時の人名) (1) 26分。 (1) 26分。 実際に対する心体や音響を悩えたり知ったりするために、簡単な器句や表現を担いて毎ねたり事え たりしている。 [記考・判断・表現] 教師の支援、評価 学者の意味が様まるように、 タンボよく質問して替え数4 現最が目標をもって質問できるように教習の疑問的を多用 ing Time を設定する。 ープ内で解決できたこと いても発表させ、全体の ルア=ブを図る。 京物に対する心情や背景を伝えたり知ったりす 5た的に、簡単な振りや表現を用いて多ねたり等 とこっしているか。(行動観察・シート) 自分の学習の足跡を自覚させ もために「何の理由を尋ねる 建成感を感じられるように、 本時での模倣りを紹介する。 えな事えなっ ・観点を提示する。 (いの学習を確かめるため やよに振り高りを発表す

単元の構想(総時数8時間)

学習指導案

(2) 指導について

本単元だけでなく、各時間の導入で教師がデモンストレーション形式でゴールを示す。そして児 童にその時間のゴールは何か考えさせた。

本単元は、第1時から第4時までは、自分の宝物について伝える内容を増やしながら、ペアで伝 え合うこととした。宝物について、好きなことやできること、普段どんなことをしているか、して

みたいことについて、伝える内容を増やしながら伝え合わせた。ペアでの活動では、話す内容が定着するように、片側の列をローテーションさせることで、違う相手と宝物の紹介ができるようにしている。第5時からは、発表を聞いて疑問に思ったことを尋ね合う形を取り入れた。そして第6時では宝物について質問を重ねて、宝物に対する心情や背景について深く掘り下げていくこととした。そうすることで、宝物について情報を聞き出す質問の仕方や、くわしく伝えるための話題の選び方について考える必要感が生まれるはずである。さらに、相手の生活の様子に対する理解が深まることも期待できる。

宝物の説明に使えそうな既習の表現は、各時間のアイスブレイキング やSmall Talkで用いて復習できるようにした。

また、教科書の巻末コミュニケーションカードに4線を加えたワークシート(図1)を作成して、宝物について伝え合ったり、やり取りしたりする際の手掛かりにできるようにした。

第6時では、それまでにペアを組んだ人とグループにならずに新鮮な気持ちで会話できるように列を入れ替えた。さらに、テンポよく会話が進むように、時間を区切ったり、一人2回質問するようにしたりした。疑問詞に自信がない児童が参考にできるように、疑問詞を黒板に掲示していつでも見られるようにした。



図 1

(3) 指導の実際

各時間のゴールの姿を理解させ、学習の見通しをもたせるために、次のようなデモンストレーションを演示した。主要な英文のみ示しているが、That's nice.やSounds good.といったリアクションを必ず言うようにしている。

第1時	T2: Hello. What is your treasure?	
	T1: My treasure is my bicycle. I like cycling.	
第2時	I can go to Jumonji, Kakunodate, and Saimyoji.	
第3時	I sometimes go cycling on Saturdays and Sundays.	
第4時	I want to go to Shimanami-Kaido. Thank you.	
第5時	T2: What is Shimanami-Kaido?	
	T1: It's the famous cycling road.	
	T2: Where is the Shimanami-Kaido?	
	T1: Between Hiroshima and Ehime.	

第6時は以下のようなデモンストレーションを行った

第6時	T2: Hello. What is your treasure?	
	T1: My treasure is my bicycle. Thank you.	
	ここでいったんデモンストレーションを終了。すぐ終わったことに驚く児童も	
	いたが、どうしたら良いか尋ねると、質問をしたら良いという意見が出された。	

T2: I have questions. How much?

T1: It's 150,000 yen.

T2: Where do you go?

T1: I go to Jumonji, Kakunodate, and Saimyoji.

T2: When do you go?

T1: Spring and fall.

第6時は、疑問詞を使った会話が中心となるのだが、このことは児童に予告しなかった。発表の形式に慣れてきた児童らは、自分の宝物の紹介にある程度の自信をもち、それまでの延長のような学習をすると思っていたはずである。しかし、デモンストレーションを見て質問したり答えたりすると理解したところから、言語活動を成立させるためにどんな質問をしたらよいか、どう答えたらよいか考え始めたはずである。

以上のような仕掛けをして授業を進めると、次のように会話が進んだグループがあった。

C2: Hello. What is your treasure?

C1: My treasure is comic book.

C3: How many do you have?

C1:21.

C4: What's your No.1?

C1: Kimetsu no Yaiba.

C3: Why?

C1: It's cool and fun.

C2: When do you get?

C1: Christmas. Christmas present.

C6: Hello. What is your treasure?

C5: My treasure is my personal computer.

C7: What color?

C5: It's black.

C8: When do you play?

C5: It's Sunday.

C6: Best YouTuber?

C5: Fishers.

C7: Oh, Fishers. Why?

C5: It's fun.

3. おわりに

外国語の指導においては、児童の使える英語が少ない中で、いかにして自分の意見を伝わるようにするかという工夫が大切である。今回の実践では宝物が題材だったことで、児童はどうやって自分の宝物について伝えるか意欲的に考えていた。外国語の授業では、児童にとって思いのある題材を選ぶことが、発話量を増やすために重要であると感じた。

話す英文をあらかじめ書いておくと、児童は話す内容が明確になり、自信をもって発話することができる。しかし、書いた英文を「読む」ことに意識が向き、「会話」にならないことも多い。本稿に記載した第6時では、疑問文はWhy?のように1語で尋ねることも許容し、ハードルを低く設定した。あえて児童に予告しない仕掛けをしたことで、聞いた内容について問答し合う即興性のある会話につなげることができた。

オールイングリッシュの授業を成立させる上でネックになることが、活動の内容やルールの説明ではないだろうか。私自身、英語であれこれ説明しようとしてもうまく伝わらず、結局やって見せたほうが早かったということは多々あった。説明しようとすると、もどかしくて日本語に頼りたくなる。そんな時こそデモンストレーションを活用したい。始めのうちは説明がないことに戸惑う児童がいるかもしれないが、繰り返すうちに慣れて、オールイングリッシュに近づいていくはずである。

児童が主体的にコミュニケーションを図る授業を目指して

~美郷町英語教育向上推進事業の実践~

美郷町立六郷小学校 教諭 沢屋 教史

1. はじめに

普段の授業の中で児童の様子を見ていると、 外国語の学習に対して熱心に向かう児童が多いが、学習した英語表現を使って他者と会話をする場面になるとなかなか会話が続かずに、 苦戦する姿を目にすることがあった。これは、話したい内容が決まってもそれを伝える表現に自信をもてずに消極的になっていることが理由として挙げられた。そこで、単元を通して言語活動などの交流の機会を多く確保し、その度に全員で困り感を解決することで、英語に対する不安を取り除きながら主体的に外国語活動を学ぶ意欲を高めていけると考えた。令和2年度に美郷町英語教育向上推進事業において実践した手立てを以下紹介していく。

2. 実践紹介

(1) 本時案について

- ·期日 令和2年11月18日
- ·学級 美郷町立仙南小学校4年2組
- ・単元 Let's Try! 2 Unit 7
 What do you want?
 ~オリジナル美郷ピザを作ろう~
- ·指導者 沢屋 教史(HRT)

Melvin Alexcie Pattern (ALT)

※指導案はHP参照

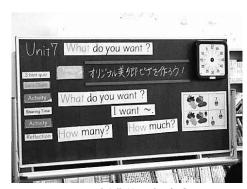


図1 授業後の板書①



図2 授業後の板書②

(2) 授業実践について

①Final Goalの設定

単元の1時間目には、ALTの友人であるザック先生が将来的にピザ屋を開きたいと考えており、ザック先生に美郷町の食材を取り入れたオリジナル美郷ピザを紹介する、というゴールを児童と共に設定した。このように児童が「目的意識」や「必要感」をもつことは単元全体における児童の主体的な学びを支えるものとなり、よりよいコミュニケーション活動の実現につながったと感じる。

②思考を促す「しかけ」

やり取りをより自然に行えるように扱う食材の「色」「形」「大きさ」の異なる物を準備した。児童はロールプレイ時に必要な食材を得るために要望を伝えたり、売るために質問したりする活動が考えられ、そのためのやり取りが自然に行われる「しかけ」となった。

また、食材を得るための所持金設定(10 sennnan coins)を行うことで、「よりオリジナリティを出そう」と思考するきっかけとなるようにした。食材には美郷町のものを織り交ぜ、価格設定に差を設けた。限られた所持金の中で組み合わせを精選しながらピザの材料を考えることで、児童はより主体的に学ぶ

ことができていた。

このようなロールプレイは5・6年生での 学習にも生きてくる。本時の学習は、New Horizon Elementary5のユニット6でのレストランの注文、New Horizon Elementary6 のユニット6での様々な食材における学習の 基礎となる。児童にとって「あの時使った表 現だ」と想起できるように、様々な学習の場 面でスパイラルに表現に触れていく必要があ ると感じている。



図 3 相手に配慮したやり取り



図4「色」「形」「大きさ」の異なる食材

③中間評価(Sharing Time)の活用

店員と客に分かれての買い物ロールプレイをActivityとして設定し、欲しい物について、その数や値段を尋ねたり答えたりするやり取りを前半と後半に分けて行った。その間には中間評価(Sharing Time)を設定した。この時間では、活動でよかったところだけでなく、言い方が分からなかったり、不安に感じたりした表現を取り上げ全体で解決することをねらいとした。中間評価後の活動では、さらに自信をもってやり取りを進める姿が見られ、効果的であったと考える。

④やり取りの見取り

買い物場面ではALTと協力しながら児童の やり取りを見取り、評価していった。以下は、 実際のやり取りの一例である。

- A: Hello. What do you want?
- B: I want cheese.
- A: Do you like white cheese?
- B: No, I don't.
- A: Do you like yellow cheese?
- B: Yes, I do.
- A: How many?
- B: 1, please.
- A: Here you are.
- B: Thank you. How much?
- A: 1 sennnan coin.
- B: Here you are.
- A: Thank you.

上記で示した下線部分は本時におけるキーセンテンスである。二重下線部分は、相手によって内容が変わり、これまで身に付けてきた表現内容から児童が適切に言葉を選び、尋ねる必要がある。例で示したやり取りでは、「色」について適切に尋ねたり、答えたりしながらやり取りが行われていた。

ピザシートに入手した食材を貼り終えた後、 児童の作品をいくつか取り上げる場面があっ た。ある児童の作品を取り上げた際、以下の ような発言があった。(T:教師 S:児童)

- T: This is your pizza.
 - What vegetables do you have?
- S: A tomatoes, two. Green pepper, one. Mushroom, one. Corn, one.
- T: You have two tomatoes, one green pepper, one mushroom, and one corn.

この場面での児童の発言は正確さに欠ける 部分があるが、そのことを教師が指摘するの ではなく、リキャストして正しい言い方を聞 かせた。やり取りの多くの場面でこのような 正確さに欠けることはあるが、不完全な言い 方であってもコミュニケーションは成り立つ ことが多い。加えて母語ではない言語でのや り取りのため、児童にとっては不安が大きい はずである。授業者として児童に正しい言い 方を聞かせ、気付かせるような働きかけを心 掛けた。

⑤振り返りの充実

振り返りの時間には、自己の変容を実感できるような「振り返りの視点」を提示した。特に中間評価(Sharing Time)の設定は自己の変容を促すことにつながっており、終末の振り返りでその変容を児童自身が実感できるようにした。

本時ではロールプレイを取り入れていることから、やり取りにおける店員と客のそれぞれの立場で考えたこと、やり取りを通して学んだことを視点として提示した。やり取りで思考したことや友達のよさ、自身の改善点など、多くの児童が自己の変容を感じ取り、次時に向けて意欲を高めることができていた。



図 5 「オリジナルピザ」の完成

3. おわりに

今回の授業実践を通して、児童が楽しみながらコミュニケーション活動を行っている姿が見られたことは大きな成果であったといえる。買い物場面というロールプレイを通して、相手によってやり取りの内容が変わるのは、まさにリアルな対話であって、そのような場面では自分の思いや考えを何とかして伝える

ことが重要となる。これまで学んできたことをフルに活用しながらやり取りする姿が見られたため、今回の「しかけ」は、児童の思考を促すのに十分な手立てとなったと考える。

今回の中間評価(Sharing Time)では、児童から疑問や困り感があまり出てこなかった。スムーズなやり取りができているとも判断できるが、さらにやり取りの深まりを促す余地があったとも考えられる。例えば「こんな時はどうする?」というような教師からの「揺さぶり」となる問いを投げかけることができたのではないか。そのためにも活動場面でALTとの連携を図り、より丁寧な見取りをしていくことが重要になると考える。

国際教養大学の町田智久教授からご指導いただいた言葉の中に、楽しい授業を組み立てる上で意識したい3つのキーワードがある。それは、「Authenticity」、「Personalization」、そして「Creativity」である。「児童の身近な場面で、児童が自分に関連付けて課題を捉え、定型表現に加えて児童自身の選択に基づいた表現が使える活動を、4技能を含めて行う」ということだ。そのような授業作りを進めていくことで、より多くの児童が楽しみながら、主体的にコミュニケーションを図ろうとしていけると考える。

私は、今年度(令和4年度)から美郷町の 英語専科教員として、町内の三つの小学校で 外国語活動・外国語の指導をしている。その ような立場にいることから、実践で得た課題 を改善すると共に、成果を町内の全児童に還 元することができると考える。より多くの児 童が主体的にコミュニケーションを図る授業 を目指して、これからもよりよい手立てや指 導方法の研究を進めていきたい。

主体的・協働的に活動し、学びを深める生徒の育成

大館市立南中学校 教諭 畠山 七緒子

大館市立南中学校では、研究主題を「主体的・協働的に活動し、学びを深める生徒の育成」とし、研究の重点として次の3つの共通実践事項を設けている。

- ① 学習プロット・・・授業の見通しをもたせるとともに、学びの深まりの跡が見える工夫
- ② 直耕タイム・・・仲間と関わり合うことで学びを深め、変容や高まりを目指す時間
- ③ 振り返りの時間の充実・・・学びの価値付け・次時への意欲 本稿では、生徒の思考を広げたり深めたりするための手立てを、実践例を交えて紹介する。

1. 日頃の実践で心がけていること

- (1) ゴールに到達した生徒の姿をイメージして指導計画を作成すること 単元で、本時で身に付けさせたい力やゴールに到達した生徒の姿を具体的にイメージすること を大切にしている。それによって、以下に挙げる3点を意識することにつながる。
 - ・ゴールに到達するために、どのような活動をすればよいのか?
 - ・全員が表現できる、表現したくなる課題設定とは何か?
 - ・スパイラルな指導で身に付けさせたい力と、そのための活動(帯活動)とは何だろうか?
- (2) 単元を通して、また本時においても、生徒が変容を実感できるようにすること 他の生徒と関わり合う中で、気付きがあったり、考えが深まったりするような手立てを工夫す るようにしている。学年が上がると、難しさを感じる場面が増える傾向があるが、英語で表現す ることの楽しさや分かり合えるうれしさが実感できるような単元構成となるように工夫する。
- (3) コミュニケーションとしての英語であることを生徒に意識させること 聞き手や読み手など、常に相手意識を大切にするよう指導している。どう話したら聞き手に伝 わりやすいか、どう書いたら読み手に理解してもらえるか考える場面を意図的に設けている。そ の際に、教師から言語材料や話型を与え過ぎることがないように留意し、既習内容を生かした表 現を生徒から引き出すような声かけやフィードバックをするよう心がけている。

2. 指導事例

上記の内容を取り入れた本時指導案を一つ提示する。

単元はNew Horizon English Course 1 Stage Activity 1 "All about Me" Posterである。本校の生徒は、小学校からずっと単級で過ごしてきた仲間であるため、単純な自己紹介ポスターでは、書くことや読むことの目的が曖昧になってしまう。お互いの紹介を読みたくなる場面、状況の設定を工夫する必要がある。そこで、最終的に書いたポスターを用いて、Who am I?クイズをすることにした。クイズを通してお互いの新たな一面を知ろう、というゴールを生徒と共有することで、「書く」「読む」「話す」それぞれの活動に目的意識をもてるようにした。

(1) 指導案

本時の計画(本時3/3)

(1) ねらい 互いのことをもっとよく知るために作成したクイズを主体的に読み、誰が書いた と思うか発言したり、質疑応答、感想交流等をしたりすることができる。

【思考・判断・表現】

(2) 学習過程

段階	学習活動	時間	教師の支援と評価	学習資料
	1 Warm-up 2 Introduction (一斉)	5 7	・ペアでヒントを出しながら進められる よう励ます。	疑問詞カード
導	(1) めあてを確認する。	•	・ALTやJTEとの対話を通して、本時の めあてと活動内容を確認する。	モニター
入	「私は誰でしょう」ク もっとよく知ろう。	イズに答	えたり、質問や感想を言ったりして、お互い	のことを
	(2) 直耕タイムの形式やメモ 用紙の使い方を確認する。		・グループ編制をする。・友達のクイズの中から参考になる文を メモするよう確認する。	メモ用紙
展開	3 Quiz Time(直耕タイム) (1)2グループに分かれて活 動する。(グループ)	27	 ・一人一人が発話する機会をもてるように、挙手発表と意図的な指名のバランスを見ながら進行する。 ・解答が分かった時点で、出題した生徒が質疑応答や感想交流を進められるよう支援する。 ・全体でのクイズタイムに出題するためのクイズをグループで選出できるように、意見をまとめる。 	モニタータイマー
	クイズを読み、出題者が誰なのかを発言したり、出題文に関する質疑応答や感想交流をしたりしている。(活動の観察)			
	(2) それぞれのグループで選出されたクイズを全体で共有する。 (一斉)	6	・どんな点がよいと感じるか、生徒から 引き出す。	
終末	4 Reflection 本時の学習を振り返る。(個)	5	・振り返りの視点を明確にする。 ・数名の生徒を意図的に指名し、学びを 深めたり価値付けたりする。	振り返りカード



クイズを解くために読む



出題者が誰か考えを話す



出題者と質疑応答や 感想交流する

(2) 学びを深めるための手立て

(a)マッピングを用いた思考整理

マッピングを思考ツールとして用いることでキーワードを整理してから書かせた。伝えるべきキーワードは何か、つながりのある文にするにはどんな順番で書いたらよいか等をメモさせた。また、話の展開に応じてどんな接続詞があれば分かりやすいかも考えるよう助言した。

I like eating.

I like eating sushi. It is delicious.

My favorite sushi is tuna.

Do you like sushi?

What is your favorite sushi?

Who am I?

生徒のクイズ例

(b)既習内容を用いた自己表現

日頃から、「伝えたいことを英語でどう表現したらよいか分からない」という場面では、発想を転換する手立てを用いている。例えば、「11時間寝る時もある」と表現したい生徒は「8時に寝て、7時に起きる」と転換することで、既習内容を用いて自分の力で書くことができた。また一方で、辞書を用いて新出語句を学ぶことも大切であると感じている。例えば、本時で「フライドポテト」について紹介したい生徒がいた時に、french friesという表現を新たに覚え書いていた。こういった語句に関して、クイズをモニターで提示する時に、生徒の理解を助けるために、クイズの文面にイラストや画像をプラスした。教科書には出てこないが、生徒の発信語彙として使用頻度が多い語句は、こうした足場かけを教師が意識して行い、定着を図っていきたい。

(c)ALTとJTEのティーム・ティーチングを生かした指導

今回の授業では、直耕タイムでALTとJTEが二つの教室に分かれて活動した。少人数にすることで、一人一人の発言の機会が増えるとともに、よりよい作品を選ぶ視点を共有しやすくなった。それぞれの教室では、生徒からの質問やコメントを黒板にいくつか板書したことで、生徒は、互いの発言からよいと思うものを活用し、積極的に発言していた。ティーム・ティーチングの打合せの時間は多く取れないこともあるが、本時で身に付けさせたい力や、ゴールに到達した生徒の姿を具体的にイメージすることで、ALTと協働しながら指導・評価していくことができると感じている。

3. 成果と課題

一人では難しさを感じる活動であっても、みんなで取り組む雰囲気に後押しされ、生徒が粘り強く 取り組む姿を多く見ることができている。既習表現をスパイラルに想起させることで、英語をコミュ ニケーションのツールとして活用しようとする姿も見受けられる。

一方で、学習した内容を確かな学力として身に付けさせること、個人差が大きく影響する場面であっても全員が取り組める課題を設定すること、一人一人が自分の考えを発表する力を伸ばすことなどが今後の課題である。実践を積み重ねて、これらの課題をクリアできる生徒を育成していきたい。

学習意欲を高めるための学び合いのすゝめ

~ワクワク感と必要感を大切にした授業を目指して~

能代市立能代南中学校 教諭 水沢 佑希

1. きっかけ

私が、英語授業において「バディ(いわゆるペア)」と「ファミリー(いわゆるグループ)」を始めてから6年になった。始めたきっかけは、生徒同士で教え合っている様子が英語学習を活性化させていると気付いたからだ。英語に苦手意識をもっている生徒は、頼りになるバディがいることで、「わからない。どうしよう」という不安から解放される。一方、英語が好きな生徒や英語が得意な生徒は、頼りにされることで、「もっと英語がわかるようになりたい」「きちんと教えたい」という気持ちが高まる。また、バディに説明することによって自分自身の理解も深まる。生徒同士の相乗効果は、英語学習が楽しいという気持ちにつながり、さまざまな活動に活発に取り組む生徒の姿となっている。

今回、指導事例集執筆の話をいただいたとき、この「バディ」「ファミリー」のシステムを多くの 先生方に知ってもらい、実践してみてほしいと考えたので、例年行っているシステム作りから、実際 の指導事例まで紹介していくこととする。

2. バディとファミリーを決めるための段取り

年度初めに英語アンケートをとる。初めて担当する学年は、1学期は席を変えずにそのまま授業を行い、1学期の最後にアンケートをとるようにしている。その場合は実際の席は2学期からのスタートになる。アンケートの内容は、図1のとおり。仲のよい友達を選ぶのではなく、あくまでも英語学習にプラスになると思う相手をきちんと選ぶように指導する。そうすると、生徒も真剣に自分の相手(バディ)を選ぼうとする。また、自分自身で選んだことにより責任感が高まり、結果として英語学習をがんばろうとする気持ちが芽生えていることを感じている。

工夫した点は、「私は誰とペアになっても一生懸命頑張れます!!!」という項目をつけることだ。この項目をつけることで、マッチングしやすくなるのはもちろんだが、生徒の前向きな気持ちを引き出すことにも作用している。

そのあとに、生徒の英語力を加味して、得意な生徒とやや苦手意識をもつ 生徒がバディになるようにマッチング していく。

座席についても、バディ同士の机は 隣同士にして、さらに、教師が机間指

	英語のアンケート
組 番 名前	
	ら、さらに英語の授業を頑張れそう!と思う人は誰ですか。ただ、単に仲の
	受業で頑張れそうという視点で書くこと。
男子	女子
□ 私は誰とペアにな	っても一生懸命頑張れます!!!
☆英語のリーダー(ファミリ・	-ダー) をやってみた。
□やってみたい	□やってもいいかな □どっちでもいいですよ
□あんまりやりたくない	□絶対無理!
☆目が悪くて座席を前の方に	して欲しい人は、いますか。どちらかに○。
・前の方でお願いします	どこでも黒板見えます

図 1

導しやすい通路側に比較的英語の不得意な生徒を配置するなど工夫している。

得意な人が不得意な人に一方的に教えるので学び合いにならないと思われるかもしれないが、得意な生徒は、不得意な生徒に説明することによって自分自身の学びが深まると考えている。また、英語の不得意な生徒も活躍できるように、バディ同士での様々な活動を設定している。

また、バディを選ぶのと同時に、ファミリーダー(グループリーダー)も決めている。 $5\sim6$ 人のグループでファミリーダーを 1 名決める。ファミリーダーは立候補を基にして決めており、生徒の意欲向上につながっている。

学年末に、生徒にバディ・ファミリーについてアンケートをとったところ、「分からないときは、バディにすぐに確認しながら課題を解決できるところがいい」「ファミリーに迷惑をかけられないという気持ちから今まで以上に授業に集中できた」「バディやファミリーメンバーの助言のおかげで、自信をもって挙手・発表できた」という声が多かった。また、ファミリーダーは「自分がお手本になって、単語や英文を読まなければならない場面があるので、先生の発音をさらに注意深く聞くようになった」などの声もあった。バディとファミリー制度を継続してほしいかという問いに対しては、毎年、95%の生徒が継続してほしいと回答している。

3. 実践例

(1) 前時の復習

前時の復習の際、バディ・ファミリーで図2のような活動を行っている。バディ・ファミリーの活動にすることで、一人一人の生徒がしっかり確認したり、不安な気持ちがなく活動に生き生きと取り組んだりすることができる。

図2の「ファミリーで読み練習」では、ファミリーダーが 主となって、①Repeat(本文をリピートする)、②シャド 前時の復習をする。 例文の意味の確認 ペアで読み練習 ファミリーで読み練習 ファミリーダーによるクイズ

図 2

ーイング、③クイズの3つを行う。③のクイズは、本文の内容に関する問題を教師が用意し、クイズ形式で復習を行う。3年生のファミリーダーになると、教師が用意した問題ではなく、自分で考えた問題を出題できるようになる。こうした成長も、それまでの積み重ねによるところが大きい。

前時の復習が明るい雰囲気で始まることで、本時の学習課題に意欲的に取り組もうとする生徒の 姿につながっていると実感している。本校では、このような前時の復習を、外国語だけでなく、他 教科でも実践している。学習内容の定着の一助として続けていきたい。

(2)協力して課題解決

復習以外にも、バディやファミリーと共に協力して、課題解決の活動を行っている。バディとの活動を通称「バディ活」、ファミリーでの活動を通称「ファミ活」と呼びながら、生徒は意欲をもって取り組んでいる。

3年生のUnit 5 ガンディーの人生について学習する単元では、ガンディーの歩んできた人生の前半と後半をバディで読み、ピクチャーカードを用いて、紙芝居形式でバディに伝えるという活動を行った。前半しか読んでいないバディに対して、後半部分の内容について、絵を示しながら、その

場でリテリングすることは、かなり難易度が高いと思ったが、生徒たちは必死で伝えようとし、バディのために必死に聞き取ろうとしていた。リテリングする際には、本文からキーワードを抜き出すことの大切さに気付くことができた。

2年生の「海外でのトラブル」という単元では、ファミリー毎に海外で想定されるトラブルを記入したミッションカードを配り、ALTにそのトラブルを解決するために交渉しに行くという活動を行った。既習の助動詞を駆使し、仲間と協力しながら、なんとかトラブルを解決しようとする姿があった。ALTが生徒の発言に対して質問を続けたことで、その場で臨機応変に答えなければならない状況となった。生徒たちは苦労しながらも、協力しながら、最善の言い回しを思考することができた。

(3) スモールトーク、スモールテスト、意見交換会

授業の帯活動として、次のような活動も行っている。

- ・最初のトピックを指定して、バディとスモールトークを2分間続ける。
- ・ある課題を提示 (例えば、三単現の s を含む一般動詞の肯定文、否定文、疑問文の作り方など) →ファミリーになって学習 (その際、文法についての質問等は、ファミリーダーが請け負う) → スモールテスト→ファミリー毎に平均点を出して競わせる。最終的には、個人の力を伸ばしていくことが必要になるが、「ファミリー」として活動することで、チームのために頑張ることが原動力や動機付けとなり、最終的には生徒一人一人の英語力向上につながることを実感させたい。

4. 成果と課題

「バディ」「ファミリー」のシステムを行った成果としては、次の5点を挙げたい。

- ・英語が好きな生徒が増える。
- ・苦手な生徒も安心して授業に参加できる。
- ・授業の雰囲気のよさから学級経営にも好影響を与える。
- ・リーダーの育成につながる。
- ・スピーキング力とライティング力が向上する。

R3年度秋田県学習状況調査(1学年)では、5教科のうち英語だけが県平均を上回る結果になったこと、R4年度秋田県学習状況調査(2学年)では、県平均を上回り、R3年度よりも更に数値が上がっていたことについても、この活動の成果として捉えている。

課題としては、リーダー任せになってしまうと、リーダーの力量次第でファミリーが学習できる幅が狭まってしまう可能性があること、自律した学習者に成長させていく手立ての必要性などが挙げられる。また、バディやファミリーでの話し合いが多くなるために、課題にしっかり向かっているかの確認や中間評価が重要になる。これらの課題と向き合いながら、今後も実践を重ねていきたい。

「教科書の内容に一歩踏み込んだ言語活動を目指して」 ~メモに基づくスピーキング指導~

秋田南高等学校中等部 教諭 吉澤 孝幸

1. 「教科書の内容に踏み込む」とは?

教科書本文と言語活動との関連を考えた時、ともすれば教科書本文の意味を理解すること自体が目的になり、その後の言語活動は「付録」的な扱いになることはないだろうか。むしろ、その単元の最終目標として設定する言語活動を達成するために必要な「情報」や「言語形式」を教科書から得ることが望ましいと考える。本実践において「教科書の内容に踏み込む」とは、教科書の話題をきっかけにして単元のゴールとなる言語活動を行うことと考えている。

2. なぜ、内容に踏み込んだ言語活動を行うのか

教科書の目標文を扱う授業では、目標文を用いての言語活動が行われ易いが、教科書本文を主体とする授業の場合でも、同等に言語活動が行われているか振り返ることは大切である。読んだ内容に基づいた言語活動を十分に行うことで「目標文を扱った授業では言語活動が行われるが、本文を扱う時はどうしても理解が中心」という状態から脱却し、「教室」という言語使用域を「コミュニケーションの場」として最大限に活用することにつながると考えている。

このことは、新学習指導要領解説の「言語活動の使用場面の例」において(ア)と(イ)の項目が 従来のものと逆になった理由の一つとも軌を一にするものである。また、目標文を扱う言語活動では、 特定の言語形式に意識が届きやすいが、読んだ内容に基づいて行う言語活動では、その時点で生徒が 身に付けている知識や英語力を総動員しなければならず、使用する表現も多様になるためその形式に も意識が届きにくくなる。そのような場面こそ、生きた情報(内容)を伝えながらも、言語形式にも 意識を行き届かせる良い機会にもなると考える。

3. 手段としての「メモに基づくスピーキング」

本実践は、読んだ内容に基づいて言語活動を行うことに焦点を当てている。これは「読むこと」と 「話すこと」を統合した言語活動であり、目標とする活動を「限られた時間」で行うこととしている。 本時の言語活動の骨子は、次の通りである。

> 与えられた英文の落としてはならない情報を、自分で作成したメモに基づいて 口頭で要約することができる。

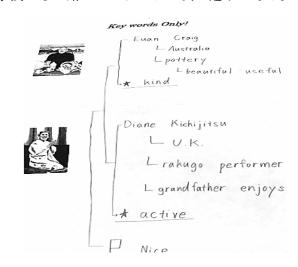
> > その上で



英文の内容に対する感想や意見、関連した経験などの伝えようとする内容を整理し、自分で作成したメモに基づいて口頭で伝えることができる。

将来的に即興で自分の考えなどを伝えることができるようになる段階を見据え、その「橋渡し」の 役割を果たす手段として、「メモに基づくスピーキング」を本校では、中学1年次より取り入れてき た。限られた時間で、伝える内容を整理するための手段として用いたステップは次の通りである。

- ① 伝える内容を整理する。
- ② キーワードでメモを構成する。
- ③ 頭の中で英文を構成し、伝える。
- ④ 的確に伝えられなかった部分を 書いて修正する。



<メモの作成にあたって>

メモ書きを作成するにあたり1年次後半から2年次中盤には、問いに対する答えをキーワード としてメモを作成する観点を与えた。

また、読んだ内容を伝える場合、同じ英文を読んでいるので、表現形式は異なるものの内容をすでに知っている中での言語活動になりがちである。このことを解決するために、手元に形容詞の一覧表をもたせ、最後に付け加えるように指導した。形容詞は、人の価値観を表すことから、中学1年生であっても、形容詞1語を付け加えることで自分の価値観を表してスピーチすることが可能になる。

<メモを基に発話する際に>

発話の流れを決める。

現行の教科書は1年生の題材といっても英文量は多い。全てのセクションを見渡せるように地図をイメージし、情報が階層化されたメモの作成を指導している。

<キーワードを階層化して配列する>

最も階層が上のキーワードのみ頭に入れればスピーチの形になるようにする。

詳細は、その場で想起したことを述べることでOKとする。再話のように、英文の断片を再生するのでなく、英語話者のロジックに沿って話すことの重要さを理解させる。

<何かを言ったら、必ず補足(詳細情報)を入れるようにする>

階層的なメモを基に概要を伝える経験をすることで、いきなり新規の話題について話す時も、 必ず何か言ったら詳細を加えて、説明する習慣を形成させる。

<形容詞を有効に活用する>

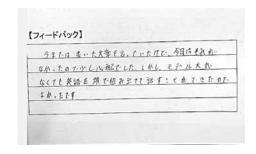
形容詞を配置するにもいろいろバリエーションがあることを示す。

- · 形容詞 1 語
- ・プラスイメージ形容詞 and プラスイメージ形容詞
- ・マイナスイメージ形容詞 but プラスイメージ形容詞

<中1 はじめてのキーワードスピーキングと感想>

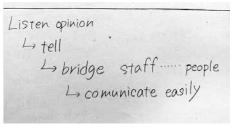
教科書の英文をもとに、キーワードを教師が抜いておいて、それを基に「自分の体験」について限られた時間で話す内容を構成して、伝え合う活動を行った。「モデル文なしで」と「組み立てて話す」という視点が生まれた様子がうかがえた。





<中3 1分で話す内容を組み立てる>

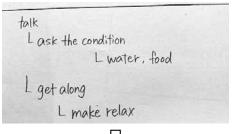
教科書単元の冒頭にある「問い」(How can you help each other in a shelter?)を問いかけ、自分の意見を1分で構成させた。対象が3年生なので、敢えて細かい手順は踏まず "Keyword Only!" の一声で活動に入らせた。グループで伝え合わせた後に、クラス全体で共有した。





I listened to the opinions of people in need. I think I should tell the staff members about their opinions. I can become a bridge between the staff members and people there. That will help them communicate easily.

※2つとも原文ママ





I will talk to foreign people. I will ask them about their conditions. For example, I will ask them, "Do you have enough food and water?" Also, I want to get along with them by talking with them a lot. We can be friends even if we have a conversation enough. I want to make them positive and relaxed.

4. 「真のやり取り」を

英語が口から出てこないで、「う~ん」と手を動かしながら、単語を言う。発話は、1語であるにもかかわらず、聞き手が「こんなこと?」と確かめる。それに対して、「そうそう。それそれ。」という表情で応じる。生徒の持つ英語力と経験を総動員して行う情報交換こそが「やり取り」を真正にする。

予想外の展開になった時こそ、絶好のチャンスである。教師も生徒も真剣勝負である。「振り返って、もう一回やってみよう」からは生まれない、新鮮さや動機づけがそこにはある。情報と場面の新鮮さこそが、英語に対する生徒の「気付き」を促すと感じている。

主体的にコミュニケーションを図り、自然なやり取りができる生徒の育成 ~ 自分の思いを伝えようとする意欲を高める言語活動の充実~

由利本莊市立本莊南中学校 教諭 池田 勇作

1. はじめに

由利本荘市では、令和元年度から「拠点校・協力校英語授業改善事業」を通して県内大学等と効果的に連携して、外国語活動・外国語(英語)担当教員の指導力及び英語力の向上を図るとともに、モデルとなる実践事例を県内の他校に提供することにより、当該校の成果の普及を図ってきた。令和3年度は、鶴舞小学校と本荘南中学校が拠点校として研究を進めた。

本荘南中学校では、研究内容として、次の4つに取り組んだ。

- ① 英語による言語活動の充実
- ② 指導の改善及び評価の在り方
- ③ 外国語 (英語) 担当教員の英語力及び指導力の向上
- ④ 校種間の連携の在り方

今回は、②「指導の改善及び評価の在り方」の、特に「即興で話すこと」を中心とした研究に焦点を当てて、指導事例を紹介することとする。

2. 公開研究会(R3/12/9)に向けての取組

(1) より自然なやり取りにするための指導の工夫

対話を継続・発展させるために必要なスキルの定着を図ることができるように、 ALTのクリスチャン先生の提案でKey QuestionsとUseful Phrasesを作成し、提示した(下記一覧参照)。 ALT と何度も話合いを重ね、ねらいを達成するために必要と思われる表現をリストアップし、活用できるようにした。

また、授業では、コミュニケーションの大切な要素として①Catch ball,

- (2) Giving examples, (3) Giving reasons, (4) Giving explanations, (5) Sharing ideas,
- ⑥Asking opinionsの6つの視点を意識するように生徒に働きかけた。



Key Questions	Useful Phrases	
Why do you think so?	Please tell me more.	
What can we do for that?	Can you explain some more?	
What can we do in our school / at home /	Any other ideas?	
in Honjo?		
What do you think about () ?	What do you mean? / I mean that () .	
What will you do for that?	I think / I feel that () because ().	
VMF for with the WEIT I William (I) Wil	For example, ().	
	Education makes us equal / better / smarter.	
	↑ユニセフポスターに生徒が考えたキャッチフレーズを入れる	

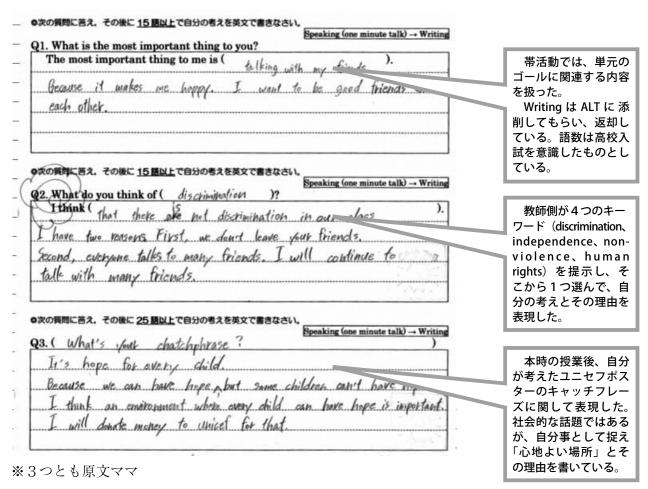
これらの表現は、本時のゴールとなるやり取りのモデル提示でも活用。

(2) 「社会的な話題 | を自分事として捉えられるような取組

これまで「社会的な話題」を扱うことは非常にハードルが高く、中学3年生でさえも難しいのではないかという不安があった。どのようにすれば「自分事」としてとらえ、よりインタラクティブな活動へつなげることができるのかということが、今回の研究授業の核となった。英語の授業だけでなく、社会科の歴史分野やSDGsの視点など、教科横断的な内容と関連付けながら、やり取りに必要な情報を逆算してインプットする必要性を感じた。

また、単元のゴールに向けた帯活動(one minute talk)にも力を入れた。単元に関連する話題についてペアを替えて複数回やり取りすることで、表現の幅が広がり、即興でのやり取りへの抵抗感を軽減させることができた。具体的には、5回1セットで、1回目は横ペアで30秒間、2回目は縦ペアで40秒間、3回目は斜めペアで50秒間、4回目は横ペアで1分、5回目は3分間でwritingして、話したことを書くことに生かせるようにした。

【Unit5 振り返りカードより】帯活動で話した内容を、書く活動へとつなげる取組



(3) 公開研究会、授業協議会より

協議会では、①伝え合う言語活動、②即興での発信力に関してグループ協議を行った。授業改善のキーワードとして、次のようなものが挙げられた。

●生徒同士の相互評価によるレベルアップ ●より良いコミュニケーションのための支援としての中間評価の在り方 ●自己の変容を促す教師の適切なフィードバック ●個人・ペア・グループ・全体等柔軟な活動形態の工夫 ●複数回のやり取りを通した内容の深化

3. 成果と課題

<成果>

- ◎生徒の英語学習に対する意欲の向上 [授業アンケート9項目中8項目で改善]
 - · 「学習課題やめあてを意識して授業に臨んでいる」87.6% (7月) →97.9% (12月)
 - →言語活動の目的・場面・状況を明確にするように心がけたことと、CAN-DO形式の目標提示により意識が向上したことが、要因として考えられる。
 - ・「先生や友達の意見を基に、よりよい方法や考え方を取り入れようとしている」 86.4% (7月) →96.9% (12月)
 - →生徒同士の表現の学び合いや振り返りの充実による効果と考えられる。
- ◎ALTを活用したパフォーマンステストの充実
 - ・授業アンケートの自由記述において、「英語で話すことが楽しい」との記述の増加 →スモールステップによる生徒の自信や達成感につながる指導の効果と考えられる。
- ◎基礎学力の充実
 - ・県学習状況調査において、1 · 2年生ともに県平均を上回った。(1年生+3.5%、2年生+6.2%)

<課題>

- ●場面が変わっても、見方・考え方を働かせ、既習事項を活用してコミュニケーションを図ることができる生徒の育成
 - →思考力を高める学習課題や言語活動の研究
- ●「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の見直し
 - →小中連携による生徒の学びと実態の再確認を通した学習到達目標の設定
- ●単元ゴールの設定、中間評価・パフォーマンステストの評価の在り方の研究
 - →教科部内での積極的な研修機会の設定

4. まとめ

「社会的な話題」を生徒がいかに自分事として捉え、英語でやり取りできるかを何度も話し合い、本校英語科スタッフはもちろんのこと、同じく拠点校の鶴舞小学校の先生方や地区内外の英語科の先生方からたくさんのご指導をいただき、本時の授業を創り上げた。特にALTのクリスチャン先生は、授業構想の段階から深く関わっており、「主体的にコミュニケーションを図り、自然なやり取りができる生徒」を育てるために、生徒の実態を把握し、その上でどうすれば英語の力を伸ばせるかを一緒に考え、授業構築に参画してくれた。本時の授業でも、クリスチャン先生は生徒の理解度を確認しながら、お互いに学び合えるように励ましてくれた。

本時では、ユニセフポスターのキャッチフレーズを切り口に、単元のゴールを設定し、帯活動を中心に必要なインプットを与え、アウトプットにつなげる授業を構築した。国際教養大学の町田智久教授から、「社会的な話題を、自分の身近な話題に落とし込んで発言させる、考えさせることが大切である」という指導助言をいただいた。社会的な話題を考える上で、非常に重要なことだと感じた。生徒同士のやり取りが促進するような手立て、表現の幅を広げられるような効果的なフィードバックをさらに研究していきたい。

社会的な話題や即興の場面で自分の考えを伝える生徒の育成を目指して

羽後町立羽後中学校 教諭 佐藤 康之輔

1. はじめに

本校は、令和3年4月から令和4年3月までの1年間、拠点校・協力校英語授業改善事業の指定を受け、研究と授業改善に取り組んできた。本稿では、拠点校・協力校英語授業改善事業での実践をもとに、「社会的な話題や即興の場面で自分の考えを伝える生徒の育成」につながる実践例を紹介したいと思う。

2. 本校生徒の課題

拠点校・協力校英語授業改善事業では生徒の即興の場面で会話をする力を伸ばすことに重点を置いている。令和3年度の6月にアンケートを実施した結果、「即興で話すことが得意」と答えた生徒の割合は1年生25%、2年生22%、3年生17%となった。また、「根拠や理由、具体例を付けて自分の考えを伝えることができている」では、5段階評価(5:とてもよくできている、4:できている、3:どちらとも言えない、2:あまりできていない、1:できていない)で1年生3.03、2年生2.61、3年生3.45となり全体の71%が否定的な回答であったことから、本校の課題だと捉えた。

そこで、本校の授業改善の視点として、①即興で話す力を向上させる指導方法の工夫、②説得力のある話し方や内容に深まりのある話し方が定着するような指導方法の工夫、③さまざまな話題、形式でのスピーキングテストとライティングテストの実施を重点とすることとした。

3. 拠点校・協力校英語授業改善事業で行った「即興で話す力を向上させる指導方法」

① 毎時間授業の始まりの5~10分程度で行うSmall Talk
 進め方は次の通り。ペアで対話 →中間評価 →ペアを替えて対話
 身近な話題での対話に慣れてくると社会的な話題になっても、知っている知識で会話をつなげようとする生徒が増えた。以下は実際の対話例である。

指導過程

	14/1/217
身	· What did you do yesterday?
 	· What will you do this weekend?
題	· What can you enjoy in summer?
	· Do you want to live with robots?
教科	· What country do you want to visit?
書に	· Do you think students can bring
関	their smartphones to school?
関する	· Are you prepared for a disaster?
話題	· What can you do to help foreign
	people living in Ugo Town?

S1: Are you prepared for a disaster?

S2: Yes.

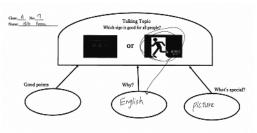
S1: What do you do?

S2:I store food and water. And I know where the local shelter is.



Small Talk の様子

② 考えをキーワードで整理させるための思考ツール クラゲチャート等の思考ツールを用いて、自分の考 えをキーワードで整理させてから会話をさせた。思考 ツールを活動の最初に書かせるだけでなく、繰り返し 使用したり見直したりすることで気付きが広がったり 考えが深まったりするように意識した。



クラゲチャート例

③ 教師側からの情報提示を最小限にし、生徒が質問することで必要な情報を得る場面設定 生徒が説得力のある会話をするためには、教師側からの情報提示を最小限にし、生徒が質問を しなければ必要な情報が得られないような場面設定をする必要があると考えた。

拠点校・協力校英語授業改善事業の研究授業では、「ALTの家族が来日することになり、来日するのに一番適した季節を提案する」ことを活動のゴールとした。以下は、生徒とALTの実際のやり取りである。

S: I think summer is good.

ALT: Oh, summer is good. Nice. Why do you think so?

S: It's because they (=ALT's family) can see the sea.

ALT: Oh, they can see the sea. What is special about the sea?

S: They can enjoy eating Japanese seafood.

ALT: What seafood can they eat?

S : Please try eating raw fish.

ALT: Oh, raw fish like sushi. Do you enjoy eating raw fish?

S: Yes.

生徒たちは教科書で日本の寿司とカリフォルニアロールの違いを学習しているので、それを踏まえて「日本の海産物を食べてほしい」というアドバイスである。ALTからの切り返しの発問にも根拠をもって答えようとする姿勢が見られた。

④ 書いてまとめて情報を整理

考えをまとめるために話した内容について作文をする時間を設定した。書いてまとめることで 情報を整理し、伝える情報の順番や理由、根拠を強化することができた。身近な話題だけでなく



社会的な話題についても会話をさせて、言えなかったことをクラス全員で共有し、もう一度ペアを替えて会話し、話した内容を書かせるという過程を大切にした。

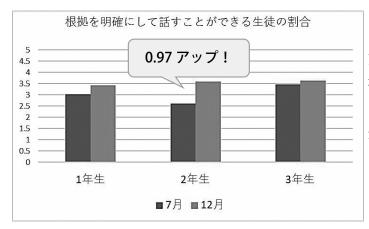
指導過程をまとめると左図のようになる。授業で積み重ねたSmall Talkや作文が単元末のパフォーマンステストにつながるようにバックワードデザインに基づいた単元構想を練った。ゴールの姿を単元の始めに生徒と共有を図り目的意識をもたせることで、生徒が見通しをもって授業へ取り組めるようになったと思われる。

4. パフォーマンステスト

上記で述べてきた指導過程を生かしたパフォーマンステストも様々行ってきた。

スピーキングテスト例	ライティングテスト例
・ALTとのやり取り	・エッセイライティング
・情報を引き出しながら助言する	· Picture Description
・ALTへの自己紹介	イラストの中の人物の状況を説明
・プレゼンテーション	・条件付き英作文

授業中にはなかなか発言できない生徒も、ALTとの1対1の会話では自分の考えを伝えることができる生徒もおり、授業で取り扱った話題を再度パフォーマンステストでも扱うと、授業前後の生徒の変容を見ることができた。指導前後の生徒の変容は以下の通りである。



話したことを書いてまとめる指導を継続した結果、県の学習状況調査のまとまりのある文章を書く問題の通過率が県平均を上回った。様々な話題について話した経験が、初めて見る話題であっても、自分のもっている知識や、知っている表現で言い換えしようという姿勢につながったと考えられる。

5. 令和4年度の挑戦

令和4年度は、5つのR、①Reading for Comprehension ②Reading aloud ③Retelling the Story ④ Text Reconstruction ⑤Revision を継続して指導している。

① Reading for Comprehension	オーラルイントロダクション、T or F
② Reading aloud	文字と音のつながり、文強勢、ピッチ、イントネーション
	などを意識して音読
③ Retelling the Story	マッピングシート(*1)にメモ→ペアで対話→メモ推敲→ペア
	で対話
④ Text Reconstruction	③を活用して本文を再構成
	→ALTからCorrective Feedback
⑤ Revision	ALTからのFeedbackを参考にして書き直す(*2)

※*1と*2については、HPに実践例を掲載

身近な話題だけでなく、社会的な話題についても即興で、かつ根拠や理由を明確にして自分の考えを伝えられる生徒を育てていきたい。既習事項を想起させる、中間評価を活用するなど1時間毎の帯活動や読解活動を充実させ、中学校3年間での英語力の向上につながるように、長期的な視点に立った指導を継続していきたい。

英語授業の小技

秋田県立秋田高等学校 教諭 伊藤 愛梨

1. はじめに

コロナ禍の休校やオンライン授業、授業動画のオンデマンド配信などがきっかけで、学校での授業の意義を考えるようになった。自分なりに出した「意義」をまとめると、次の3つとなる。

- ・「学び合う」授業
- ・「楽しく役に立ち、達成感のある」授業
- ・「自立した学習者」を育成する授業

私は、学校での学習の最大のメリットは学び合いができることにある、と考える。なぜなら、自分が今知っていること、気付いたことなどを逐一伝え合うことができるからだ。そのため、授業中ペアワークやグループワークを多く用いている。授業では、答えのすぐ出ない問いを生徒に投げかけることを意識しているため、彼らはペアで調べたり、知っていることを説明したり、考えを伝えたりする。「ジグソー学習」など、インフォメーションギャップを生じさせ、やり取りが多くなるような活動を取り入れることも多い。教科書+aの内容を扱いながら他者と情報共有する活動を取り入れることで、生徒の学習意欲が向上すると同時に、英語を通して幅広い情報へのアクセスが可能になったり、多くの情報を共有することで知見が深まったりする。そうした積み重ねが、多角的なものの見方につながることを体感させるのがねらいである。

また、自己肯定感の低い高校生が多いことも感じているため、日々の授業で、どんなに小さくても、 多くの成功体験をさせたい。そのためには、スモールステップでの活動や足場掛けを想定した教師の 教材研究が重要になる。

さらに、生徒たちが大学や就職先で英語を学び直す必要性に迫られる可能性を考え、辞書や文法書の活用方法、各スキルのトレーニング方法はできるだけ詳細に伝えるよう心掛けている。自分自身が一番実感していることだが、英語をツールとして使えることで、人生が豊かになると思うため、このことを生徒が体感できるよう指導していきたい。

これらのことを基に、「英語授業の小技」として2つの事例を紹介したい。

2. 英語授業の小技①

YouTube動画や本、論文、新聞記事などオーセンティックな題材から情報を得ることで英語学習の モチベーションを上げることができる。この活動例は、英語で得た情報を理解し、取捨選択した上で 伝えるトレーニングとして行った。

1.	活動名	ICTを活用し学びを深めよう!
2.	時間	1 1 7
3.	使用題材	「ナマケモノ」を題材にした長文、YouTube動画
4.	活動内容	・教科書の文章の内容理解→教科書から得られない情報についての問いを投げかけ、
		4人1グループで情報収集する。
5.	教材	教科書 + αの問い、調べたことを記入できるワークシート、YouTube動画等の情報源

〈成果〉

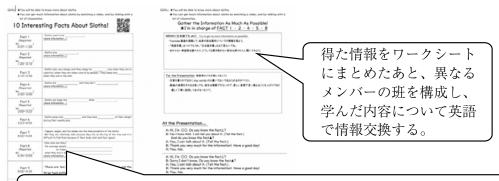
- ・オーセンティックな英文を理解できるようになった。
- ・学ぶ意欲とチャレンジ精神の醸成につながった。

〈課題〉

- ・題材探し、パラフレーズ、ワークシートの作成等、教師サイドの労力が大きいこと。
- ・どの教員でもできる教材にしていくこと、汎用性を高めること。

〈YouTube動画の中から授業で使えそうなものを選ぶポイント〉

- ・長すぎず、動画の中に文字やイラストが多く用いられているもの
- ・英語字幕が表示できるもの(日本語字幕が表示できるものもあるが、設定させない)
- ・再生回数やチャンネル登録者数が多いもの
- ・各国の政府やテレビ局、大きな団体のもの
- ・子供向けに説明されているもの

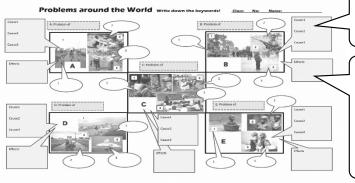


「ナマケモノ」の生息地や天敵などの情報は教科書から得ているが、好きなものや、動くスピードなど教科書にない情報を各グループに与える。YouTube動画を単一の情報源とし、それぞれの班で情報収集をした。

3. 英語授業の小技②

世界が抱える問題や現状に目を向け、最適解を模索する機会とすること、そして得た情報を英語で伝えたり意見交換したりすることに慣れることをねらいとして行った。

この事例では、教科書で扱った「戦争」についての話題を基に、世界が現在抱えている問題を SDGsと絡めて考えさせた。具体的には、「戦争」、「水」、「教育」、「環境」、「飢餓」のトピックについてTIMEの記事等を少し易しい語彙に書き換えた英文を与え、生徒は他グループへのプレゼン等を行った。



読ませる記事やワークシートを工夫して、 できるだけ読み取らせる内容を焦点化する よう心がけた。

できるだけメモから顔を上げて他のメンバーの顔を見ながら発表させたかったため、ワークシートにはキーワードだけを書くように伝えた。

大きな記入欄を設けてしまうと文を書くことができてしまうため、記入欄を小さめに 設定している。

<2コマ目>

•		
1.	活動名	SDGsを考える
2.	時間	2コマ
3.	使用題材	長文の題材 (今回は「戦争」を題材にした長文) 、教科書以外の英文記事 4 つ程度
4.	活動内容	<1コマ目> ・世界が現在抱えている問題を挙げ、SDGsの説明をする。 ・「戦争」、「水」、「教育」、「環境」、「飢餓」のトピックについてオーセンティックな 文章をパラフレーズしたもの(下記参照)を与える。 ・生徒は、内容理解を進め、プレゼンの準備をする。 <2コマ目> ・異なる問題について調べた内容を、ペアで情報共有する。 ・元のグループに戻り、自身が得た情報を再度グループで共有する。 ・解決方法が提示できそうなものを1つ選び、グループで解決策を話し合う。 ・話し合ったものの中から自分にもできそうなことについて英作文をさせる ※優秀作品は英字新聞の投書に応募する。
5.	教材	世界が抱える問題についての文章($4\sim5$ 種類程度)、情報をまとめるためのワークシート、解決策を書き込む付箋や大きめの用紙(Google Jamboardでも可能だが時間がかかる、顔を合わせての対話がなくなる、などのデメリットがあった)など



A Lifetime Without Water

A Piamer I

Here much enter do you are in one cap's Maybe you take a macenier with, with some water. In put high your meth, and a that timp is that you water. In your fails (your witten has reduced much that if a range exaction Life Apparent he built. Methy, people due", sizes fails, Apou al. We can man on the chaosanal water comes one. But there is a man on the chaosanal water comes one fails of the option of the chaosanal water comes on them well on this place, as one chan which would have fail or find people made bank love. Some of fail people in the bank love. Some of fail people in the bank love fail or of the continues on open time water.

Why initiated the case of water destings is dismits. A lot of countries in Africa have a very day through with momental through the start that is made until despity accessed. Destily is get to take the water have been also get to take the countries have been as a very day are the countries. As a base made on an avery of its late of the programment of developing countries they resonance for the start of the destily developed in the countries the countries of the countries and their millionists. The government is the start while all the countries is to go the countries are understant to develop the increase. One other reasons we can intrinsic to a develop the countries is to be 30 to

〈語彙が難しい場合の工夫・手立て〉

オーセンティックな教材を使おうとすると、どうしても語彙が難しいため、逐一辞書で単語を調べる生徒が出てくる。情報収集というよりも単語を調べることに多くの時間を費やしてしまうことになるため、次のように工夫している。

- ① オーセンティックなものをパラフレーズ(リライト)する。→「本物」を読むことにはならないが、読むスピードは上がるため情報収集に集中させられる。
- ② キーワードになりそうな単語をあらかじめリストアップしておいて、主要な単語リストを配付する。
- ③ 基本的にGoogle翻訳などのオンラインツールは使用禁止。辞書等の使用は逐一調べるのではなく、カギになりそうな単語に限定したり、あらかじめ個人やグループで推測させたあとに調べさせたりするなど、「やみくもに辞書をひく」という状態を避けるようにしている。

〈成果〉

- ・諸問題を自分事として捉える生徒が増えた。
- ・世界に関心を持つことで社会貢献意識の醸成につながった。

(調調)

- ・海外の生徒とのやり取りをしたい。
- ・解決策が表面的になりやすい。
- ・他教科との連携が効果的であること。

〈活動をスモールステップに設定した具体的な手だて〉

1回目の情報共有では1対1、2回目の情報共有では1対3で実施させた。また解決策を話し合わせる際にも、まずは個人で考えさせ、それをペアで共有させたあと、4人グループで話し合わせた。このようにスモールステップを踏みながら英語を話す機会を与えることで、少しずつ自信を得ながら英語でコミュニケーションを図ろうとする姿勢が見られた。

4. まとめ

小技②の授業を行った際、そのような問題があることを知ってはいるものの、具体的に調べたことのある生徒は少なかった。同世代の子どもたちのエピソードや非識字率の高さ、そのような問題が生じる原因などを知った生徒たちはとても驚いていた。これらの情報共有をさせてから解決策を考えさせたため、より問題を身近なものと捉え、より真剣に取り組んでいるように感じた。1年次の後半で実施した授業だったが、「SDGs」というワードを初めて知った生徒もいたことも事実である。

生徒には教科書の内容を契機として、世界の出来事に目を向け、グローバル社会で暮らす一員として世界の様々な問題を「自分事」として捉え、主体的に解決策を模索していってほしいと思う。そのためにも、冒頭で述べた「授業の3つの柱」を具体化した活動を積み重ね、生徒の姿に反映させていけるよう、今後も努力を続けていきたい。

英語授業におけるディベートの活用と評価の工夫 ~思考力と表現力の向上を目指して~

秋田県立本荘高等学校 教諭 三浦 瑞穂

1. 背景

本校では平成30年度から令和2年度までの3年間、秋田県拠点校・協力校英語授業改善事業としてディベートを取り入れた授業改善を行ってきた。各学年においてディベートの要素を取り入れた活動を行ったり、単元のまとめや内容理解の手段としてパーラメンタリーディベート(即興型ディベート)に取り組んだりした。3年間の事業を終えて、ディベート活動を単発で終わらせるのではなく、その要素を継続的に授業に取り入れることでより生徒の学習意欲の向上に寄与できるのではないかと考えた。また、改善を加えながら3年間を見通した本荘高校モデルを構築したいとの思いがあった。

2. 学校と生徒の実態

英語科重点実施事項の1つとして「ALTとのTTなどを通して生徒たちの学習意欲を喚起し、英語による意見交換やディベートなどの活動によって思考力と即興で話す力を伸長する」ことを掲げている。各学年においてワークシートや活動を共有することに加えて、学年間でも取組について検証している。

生徒はペアワークやグループワークなど協力して行う活動に非常に積極的で、英語を話すことへの抵抗が少ない。令和3年4月に1年生を対象にして行った英語学習に関する意識調査においても、「英語活動が好きか」の問いに対して、「そう思う」「ややそう思う」の生徒が80%を超えていた。

3. 実践と検証

「ディベートの要素を取り入れたアウトプット活動は学習者の意欲向上に寄与するのか」というリサーチ・クエスチョンを設定して、その検証のためにFluencyに焦点を当てた活動として以下の3つを行った。コミュニケーション英語Iの帯活動としての取組である。

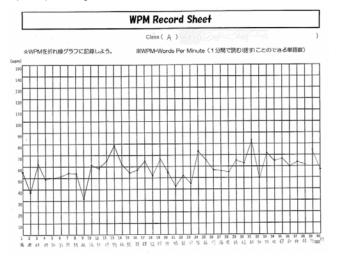
① Word Counter & WPM Record Sheet

1分間の限られた時間の中で与えられたトピックに対する自分の考えを述べる活動である。短時間で的確に主張したり、意図を伝えたりする力の伸長を目的としている。発話者は1分間のうちにできるだけ多く話すことを意識し、聞き手の生徒は発話語数を数える。言い間違いや言い換えも語数に数える。パートナーを替えて、同じトピックで取り組む。Word Counterには日付と2回分のWPM、トピックを記録する。その後、WPM Record Sheetに2回行ったうちのWPMが多い方を折れ線グラフに記録する。トピックによって話しやすさは異なるのでグラフは上下するが、数字をただ記録するよりもグラフにすることで生徒が自身の取組を振り返りやすくなる。

令和3年10月に1年生を対象にして行った英語の授業における学習活動に関する調査では、「Word Counterを使った英語活動が好きか」の問いに対して、「好き」「どちらかといえば好き」と答えた生徒が80%を超え、活動を好意的に捉えていた。「嫌い」「どちらかと言えば嫌い」と答えた生徒は英語に対する苦手意識に加え、伝えられないことのもどかしさを感じていた。「Word Counterを使った活動によって、次回はもっと話そうという気持ちになったか」という問いに対しては92%の生徒が「なった」と回答し、Word Counterの活動が嫌いだと答えた生徒で

も英語を話す意欲の向上につながっていることがわかった。

			Clas	s(F)N	0					
[目的] /*	ケートナーの	角話語数を	数える。					_		
[方法] ①	発品に合わ	せて、数字	きなそる。	の信仰のよ	o a l	構えも	語数に数え	.6.		
1	. 2	3	4	5		6	7	8	9	10
-20	19	18	17	16	-	15	14	13	12	11 *
¥21	22	23	24	25	-:	26	27	28	29	30-
~ 40	39	38	37	36	- 3	35	34	33	32	31#
41	42	43	44	45	-	46	47	48	49	50 -
-60	59	58	57	56	1	55	54	53	52	51 *
G ₆₁	62	63	64	65	1	66	67	68	69	70 -
8 0	79	78	77	76		75	74	73	72	71 *
81	82	83	84	85	1	96	87	88	89	90 •
100	99	98	97	96		95	94	93	92	91 *
101	102	103	104	105	1	06	107	108	109	110
- 120	119	118	117	116	1	15	114	113	112	1111
121	122	123	124	125	1	26	127	128	129	130•
-140	139	138	137	136	1	35	134	133	132	1314
141	142	143	144	145	1	46	147	148	149	150
Date	WPM		Topic		Т	ate	WPM		Topic	
1 1/0	31/88	2.17 - :	ntraductio	0	21	1/29	12/63	Anna Yax	day is a good	meter also
2 4/2	59/85	weeland			22	%	48/63	YesTular		
3 1/18	30/58	after s			23	34	65/34	Tokya 6	Aktio.	
4 %	84/84	free t			24	7/2	50/ 66	Rendina ce	tico, it a so	che of time
5 ½e	34/ 79	traveling			25	1/4	32/61	hammerle		
6 4/22	57/68	Til or you		in chapted	26	1/4	59/61	p-hoel_uc	chosts	
7 1/23	49/32	Win do an	word transft	Jiller dat er elter	27	3/8	75/84	assetritore	9	
8 1/2	20/64	How do		steer?	28	7/4	50 / 85	tores.	os wider	
9 1/2	15/ 77	arlden i	,		29	1/20	43/ 39		er folioso a	the direct
10 %	59/ 55	Reedigs		week of tee	30	8/24	59/67	Sunner	varation	
11 %	51 64	We shall	alabi adau	. selferna	31	1/2	47/ 49	Marie, are	Letter then	zelos
12 3/8	52/49	Ten and to a		was firm	32	1/29	60/69	Sinder 6	three a	day to the
13 5/4	68 / 101	the state of	es whole to a	and for topolo	33	1/4	50/ 23		nessay for	
14 %	95/81	Stolinging	enan in Japan 19	A seek a series	34	%	55/64	1	singer simil for	
15 %	66/21		aired	hisp1.	35	1/2	49 / 65		dilaton bid	
16 1/20	51/58		J bee mink	/n -2/140	36	1/5	96/62		Market State	
17 3/02	54/ 15	-	of the second		37	19/1	49/15	Cale Sie		ther fee, and
	63/65		But they clo		38	10/6	49/57	situl coderie		in reliefs.
722								SHEET, GUIDLE		
722	49/58	Toche-lat only		The Estates	39	%	47/ 33	an all to	war delek	Sa book



Word Counter及び WPM Record Sheet記載例

② トピックの段階的提示

Word Counterにおけるトピックの内容や形式を月毎に変えた。以下がスピーチトピックの例である。

- ① Personal Question 自分のこと (4月)
 - What do you like to do in your free time?
 - Where do you want to go for traveling?
 - Who do you want to meet? Either dead or alive.
- ② Opinion Question 意見(5月)
 - Some people lose their health by working too hard. What do you think about that?
 - Some people try to stay active even after retirement age. What do you think about that?
- ③ Reasoning Question 賛成・反対と理由(6月)
 - Do you think it is a good idea to live near a large shopping mall?
 - Do you think it is a good idea to study while listening to music?
- ④ Statement 与えられた立場での賛成・反対と理由(7月以降)
 - School uniforms should [should not] be abolished.
 - YouTuber is a good career choice.

個人的な質問から一般化した質問や社会的な話題に段階的に変化させた。意見を理由と共に述べたり、ディベートの要素を取り入れて与えられた立場での賛成・反対を理由と共に述べたりする活動を行った。

1年生の夏休み明けからは反論を意識させた。肯定側が1分間で主張した後、否定側がそれに 1分間で反論と自身の立場の意見を述べる。反論の際に以下のように反論の型を提示した。

I don't think~. You said~. However, it is not true [not always true / not important / not relevant] because~.

与えられた立場での主張や反論を意識することで批判的思考力の育成を図った。

③ Review Sheet

Word Counterを使ったスピーチの後、英語で表現できなかったことをReview Sheetに書かせた。単語でも文でもよいこととし、生徒は辞書を使って調べたり、授業終了後に教科担任に質問したりする。スピーチをする際に表現したい日本語をそのまま英語に変換しようとしてしまい、相当する表現を知らないため英語で表現できないという場合がある。語彙の少なさという問題もあるが、日本語をより表現しやすい日本語に変換することでFluencyと表現力の高まりにつながると考えた。

生徒を対象にした英語活動に関する調査の結果、「英語で言えなかったことが言えるようになった」「英作文の練習にもなるのでよい」といった意見があった。Review Sheetの活用は、新しい知識の獲得と既習の知識の想起につながった。

Review Sheet Class (デ) No. ☆思いたかったけど表現できなかったことを書き出そう。

_	COATE COATE	Freshit
Н	日本語	English :
1	(4のからしは) 何でも作ることができます	You can make Severy thing lin the game
2	食八分(细似)	(1 Me) bread ~ 12 1/1/16 72
3	What I did first {is : ~~~	first, I ned
4	問題を解く	solve ~
5	travel of 184938?	あてをかける bortok
6	build	"1
7	教室でけざいことをしな	
8	relieve stress = ~makes me (2)	
9	着づらい	
10	仲間	group, friend a sinter
11	能かが身にっかない	develop -
12	- 効率よく	efficient (Bu)
13	ビテオ <u>画社</u>	-> call (telephone call)
14	随視する	watch, monitor
15	-1、制理 4 1	likit - to minutes
16	放射線	radioactive rap E
17	感染者	indected person
18	感染13	catch ~, get insected with
19	へがさらされる、漏れる	mill be revealed
20	\$116.	cause a - flare-up

4. 成果と課題

Word Counterを用いた発話語数の可視化は、生徒自身が成長を実感でき、さらに力を伸ばしたいという動機付けの一因となっている。ディベートの要素を取り入れて肯定・否定の与えられた立場でのスピーチも批判的思考力の育成に有効であると考える。それぞれの論題に対する自分の意見と与えられた立場が合致する場合もあれば、そうでないこともある。そういった時に「どういった論点が考えられるのか」や「相手の主張をそのまま受け入れるのではなく、本当にそう言えるのか」、と新たな視点を探ることができるのもディベートの魅力の一つである。これは英語学習だけではなく、様々な場面でも活用することができる。

課題として、論理的思考力をどう伸長させていくかということと、どう評価していくか、ということが挙げられる。論理的思考力は短期間で伸ばすことは難しく、長期的な取組が必要である。また、評価基準や評価方法についても検討する必要があると感じている。

最後に3年間を見通したディベートの活用として以下の流れを提案したい。ディベートにおける「立論→反論→まとめ」の一連の流れを体験させることは英語力育成に有効であると考える。一方で、時間的制約や生徒の学力差などからディベート活動の導入に消極的になってしまう場合もある。しかし、ディベートの要素を普段の授業の中で取り入れていくことで確実に生徒は成長できる。「できない」と導入前に断念するのではなく、積極的に取り入れるべきである。引き続きディベートの活用方法を模索しながら、本荘高校モデルの構築を目指したい。

1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期
意見・反論	反論	立論→反論	反論→再反論	ディベート —	

英語で地域の魅力を発信できる生徒の育成

~学校独自の英語学習テキスト Welcome to Nikaho を用いて~

秋田県立仁賀保高等学校 教諭 畠山 陽子

1. はじめに

本校は、にかほ市と連携協定を結んでおり、学習活動・学校行事において、地域貢献・活性化につながる活動を取り入れている。英語科の授業においても、自分たちの地域のことを英語で発信することを学習目標の一つとし、様々な活動を行ってきた。昨年度からは、本校独自の英語学習テキストであるWelcome to Nikahoを用いて、地域のことを学び、それらを他者と共有する活動に取り組んでいる。この指導事例集ではWelcome to Nikahoを使用した事例を紹介するが、教科書や他の教材でも応用できると考えている。

2. Welcome to Nikahoについて

<u>Welcome to Nikaho</u> (以下、本冊子) は、前ALTのJohann Botha先生と英語科教員が、にかほ市の協力を得て制作した。地域の観光・レクリエーション・公園(Sightseeing・Recreation・Park)、英語表現集(Situational Expressions)をまとめた冊子であり、全校生徒に配付し英語の授業で活用している。

3. 指導・取組の実際

本校の学習到達目標リスト[CAN-DO LIST]のSpeakingにおける下表の目標を達成するための取組として、本冊子を段階的に用いて、1年生から3年生へと徐々にレベルアップすることができるように活動を行っている。TT授業での学習を基本とし、1年次は本冊子の各場所の基本情報、2年次は各場所の詳しい情報、3年次はさらに詳しく地域の場所やその魅力等について学習している。また、地域の魅力(場所・特産品・おすすめの店等)を紹介するプレゼンテーションも行っている。1年次はグループ発表、2・3年次は個人発表とし、インタラクションの方法も段階的にレベルアップした質疑応答となるようにしている。

今回はそれらの活動から、2年生で行った活動Aと、3年生で行った活動Bについて、それぞれの活動の成果と課題について紹介する。

学年	CAN-DO LIST Speaking (Production)						
1	身近な話題やにかほ市のことについて20秒程度、話し続けることができる。						
2	身近な話題やにかほ市のことについて40秒程度、話し続けることができる。						
3	身近な話題やにかほ市のことについて60秒程度、即興で話したり、質疑応答したりできる。						

活動A(2年生)

- (1) **目標** ・外国からの旅行者に、鳥海山について自分の体験を加えて紹介することができる。
 - ・各グループの発表に対して質問し、また該当グループはその質問に答えることができる。

(2) 指導の流れ

- ・本冊子(Mt.Chokai / Hokodate Observatory and Trailhead)の学習
- ・Topicの選択、スライドの共有等Chromebookの用い方、役割決め
- ・スライド作成
- ・JTE、ALTとのプレゼンテーションの練習
- ・クラス全体へのプレゼンテーション/評価シート記入
- · 質疑応答

成果と課題

○Chromebook・電子黒板の活用

- ・Chromebook と電子黒板により、課題の共有やスライド作成時の情報交換の効率化等ができた。 具体的には、Chromebookでクラスルームにスライドのテンプレートを配付し、リーダーがスライドを他の班員と共有することで、グループごとに協力しながら1つのプレゼンテーションのスライドを作成することができた。教師側も各グループの進捗状況の確認やアドバイスを効果的に行うことができた。
- ・実際に生徒が登山した経験からのアドバイスや感想を英文で書く課題をクラスルームで配付し、 スプレッドシートに入力させた。お互いの英文を見て、なるべく他の人と違う体験や感想となる ように工夫したり互いの感想を共有したりすることができた。

○本冊子の活用と応用

・グループ分けの際に、alpine plants / height・nick name / events / famous for ~ / visitor center の5つのテーマと、Tembodai / Ohama・Chokai Lake / Sainokawara / Shimegake / Omonoimi shrineの5つの場所から1つずつ選択させた。このことで、同じ鳥海山のプレゼンテーションでも、それぞれの班が違うテーマ、場所についての体験や写真を発表することになり、発表に対するモチベーションをより高めることができた。

○英語でのやり取り

・1年次は、発表に対してALTによる質問に答える活動が主であったため、発表毎に質問する班を割り当て、英語の質問を考える時間を与え、その質問を電子黒板に書かせた。このことで、各班は質問に対する答えを準備する時間を確保でき、生徒間での英語のやり取りにつながった。今後は、即興での質疑応答ができるように、英語でやり取りをする機会を毎時間の授業でも多く設けていきたい。

○その他

- ・発表を聞く際にはワークシートにキーワードをメモすることで理解を深め、英語で質問する準備をさせた。しかし、発表を聞きスライドを見ながらメモをとるという活動はとても難しかったようだ。英文読解やリスニング等において要点を押さえることを意識した活動を行っていきたい。
- ・スライドに英文が書かれているグループが多かったため、スライドはキーワードや写真のみでま とめさせたい。また、スライドや原稿を単に読む発表から、聞き手の方を見て、自分の言葉で相 手に伝える発表へとレベルアップさせていきたい。

活動 B (3年生)

(1) 目標 ・新ALTのJosh先生に、自分の住む地域や自分のことを紹介することができる。 ・プレゼンテーションの際は、即興で質疑応答できる。

(2) 指導の流れ

- ・地域の魅力・課題等のスライド①作成・練習
- ・地域紹介のスライド②作成・練習
- ・自己紹介のスライド③作成・練習
- ・授業外でのプレゼンテーション(*冬休みの課題)
- · Josh先生へのプレゼンテーション(Speaking Testを兼ねる)
- *冬休みの課題

校内の友達と先生合わせて4人、保護者や学校外の友人など2人、計6人にプレゼンする。

成果と課題

○Chromebook・電子黒板の活用

・自分が撮影した写真や動画を入れたり、アニメーションを用いたりするなど、分かりやすく興味 を持てるスライドを作成することができるようになった。

○本冊子の活用と応用

- ・Chromebookを個人で使用できるため、放課後や自宅等でプレゼンテーションの練習を行うことができ、プレゼンテーションの回数を重ねることで、パフォーマンスを改善することができた。
- ・本冊子を学習してきたことで生徒は、地元について知らないことが多くあると認識することができた。そのため、3年次は本冊子に記載されていることに加えて地域のより詳しい情報についての英文を読んだり、調べたりした。また、相手に紹介するためには、自分が話すことができる英語に直して伝えなければならないこと、自分の経験を交えて話すことで説得力が増すことを、活動を通じて学ぶことができた。

○英語でのやり取り

- ・スライド毎に聞き手に質問をすることを課すことで、やり取りの機会が増えた。
- ・個人の活動にすることで、全員が英語でのやり取りに取り組むことができた。
- ・即興でのやり取りは難しく、語彙力・リスニング力など、総合的な英語の力が必要で、生徒の言語活動を増やすことが大切であると実感した。
- ・スライドの画面は、英文ではなくキーワードや写真にすることで、「スライドの英文を見て読む 発表」から、「聞き手の方を見ながら発表したり、質問したりする活動」に発展することができ た。

○その他

- ・生徒は、「新しいALTの先生に自分の住む地域や自分のことを紹介する」という実践的な目標 に向かって意欲的に活動に取り組むことができた。コミュニケーションの目的や場面設定が重要 であることを改めて感じた。
- ・保護者や他学年の生徒、他教科の先生にプレゼンテーションを行い、評価してもらったことで改善点を見つけ、次のプレゼンテーションに活かすという過程を繰り返したことが自信を持つことにつながり、プレゼンテーションをよりよいものに改善していくことができた。
- ・総合的な探究の時間に取り組んだ「地域の課題解決の活動」を、地域の魅力・課題のスライド発表に活かすことができたことは、横断的な教科指導につながると感じた。

4. まとめ

本冊子を用いた授業は始まったばかりである。どの生徒にとっても、「伝えたい」という気持ちで言語活動を行う実践的な場面を多く設定し、意欲的に取り組んで達成感を持てるような活動にしていきたい。今後、生徒が調べたことや経験したこと等を付け足すなどして改訂版を作成する予定である。本冊子を活用して自分の住む地域について、にかほ市を訪れる人々や、自分が将来住む地域や国の人々に、自信を持って紹介できる生徒を育成していきたい。

発信力や表現力を伸ばす指導法について

秋田県立角館高等学校 教諭 大塚 繁太郎

1. はじめに

私が授業で意識していることは二つある。一つ目は、自律した人間の成長、二つ目は、楽しく学ぶということである。現在のVUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity)の時代に生徒は、自ら課題を見つけ、試行錯誤を繰り返しながら、仲間とともに新しい価値を作らなければならないからである。そのためには、学校では、失敗から何かを学ぶ習慣が重要であり、生徒が楽しんで自ら進んで物事に取り組む環境を作る必要があると考えている。

私は、角館高校でアクティブラーニングとアウトプット活動を活かすことに重点を置いて取組を重ねてきた。分かったことは、目的が明確ならば、生徒は驚くほど成長するということ、教員自身が挑戦する姿を見せ続けるとそれに反応して生徒はまた成長するということだった。合い言葉は、「失敗しても大丈夫、そこから学んでいこう」であった。この場をお借りして活動例をいくつか紹介してみたいと思う。

2. アウトプット活動例

- (1) 1分間スピーチ (ペアワーク) *目的は、ディベートで3分半語れるようになること。
 - (手順) 1. 授業に関連するトピックを設定し、リンクマップを作成し、自分の考えを英語で語る。
 - 2. ワードカウンターシートを用いて、発話量を数値化する。
 - (効果) 1. 生徒はスピーチの構成を学び、何を考え、何を語るべきなのかが明確になる。 小論文や面接の指導もしやすくなる。
 - 2. 話すことが書くことの質を向上させる。実用英語技能検定でもライティングの成績が 大きな得点源になり、2級合格者が増加した。文法事項の間違いの改善もしやすくな る。
 - 3. 他者への自己開示が信頼関係の構築となり、授業態度の大きな改善が見られた。

(指導上の留意点)

- 1. AREAとConclusion Comes Firstの概念を徹底する。 (AREA =Assertion, Reason, Example, Assertion)
- 2. 文法間違いを指摘しすぎない。(1)内容の評価(2)良い点の提示(3)改善点の提示が学習意欲の向上に直接的な影響を与え、前向きに取り組む態度が向上する。

(2) 一文発話トレーニング (ペアワーク)

(活動の仕方) 教師がワード数を決める。生徒は、主語と動詞を使って英文を発話する。

- *文法事項を指定し、ワード数を増やして英文の情報量を増やせるように負荷を 上げていくと、生徒の英文の質が向上する。
- (効果) 1. 英語の構造に慣れる。(ALTから主語と動詞は必須だと指摘があった。)
 - 2. 発話できるようになると、スペルのミスはあるが、英文を書けるようになる。
 - 3. 英語脳の育成に大きな影響があった。生徒にとってはとても楽しい学びであった。
- (3) 教科書の表現を使った活用練習 (グループワーク/ペアワーク)
 - (手順) 1. リスト内の単語を使って交互に一文ずつ英文を発話し、1分間の英文の合計数を競う。
 - 2. グループワークの際には、第三者にペアの活動を評価してもらう。
 - (効果) 1. 単語や熟語の活用機会が増え、表現の定着率が上がる。
 - 2. 文法事項の復習ができる。特に、主語+動詞の形を作る訓練ができる。

- 3. 教科書を読むとなったときに、分かる単語が増えるため、読解活動がスムーズになった。
- (4) Free Story Telling 活動(ペアワーク)
 - (手順) 1. 教科書の単語リストを使って、自由に物語を作り、30秒、1分と英語で語らせる。
 - 2. ペアを替えながら、発表し、修正の時間を設けながら実践する。
 - 3. 聞き手にコメントさせ、良い点と改善点を述べさせる。
 - (効果) 1. 英文を数多く発話することができ、英作文力の向上に効果がある。
 - 2. 文章構成力など思考力が向上する。前述のトレーニングとの相乗効果で英語の発話量を大きく増やすことができる。
 - 3. 自由度が高い活動なので、伝えようとする意欲が高まり、工夫する習慣が芽生える。
 - 4. 授業で生徒の笑顔ややる気に満ちた姿が増えた。英文を書かせる場面でもその分量は格段に増加した。話すことと書くことのつながりは非常に大きいと感じている。

(5) Information Gap $(^{\alpha} 77-7)$

- (手順) 生徒A: 単語リストを見て、語句の説明を英語で行う。ただし、その語句自体は言わない。 生徒B: 単語の内容を推測し、答えていく。
- (効果) 1. 創造力、推測力、多様な視点で物事を捉える力を育成できる。
 - 2. 既習事項の定着や活用力の強化に役立つ。また、即興性が高く、パーソナライズできる活動であるため、やり取りの力やより自然な英語運用力の養成に役立つ。

(6) しりとり英文 (グループワーク)

- (手順) 1. 教師側から英文を一文提示する。
 - 2. 生徒Aが英文を読む。生徒Bは、生徒Aの英文内の単語に着目し、それを使って関係する英文を発話する。生徒Cは同じことを繰り返す。
 - *順番に発話させてもいいし、次の人を指名させるなど、変化を出してもいい。
- (効果) 1. 論理的に文章を構成する習慣や、即興で英文を作る習慣を身に付けられる。
 - 2. 複数の生徒の前で発表する機会や自分で単語を選択する機会となる。生徒は失敗から 学べるため自律して行動する手助けとなる。

(7) プレゼンテーション活動

(活動の仕方)

- 1. レッスンのパートが終わる度に、簡単なスライドを作成する。
- 2. リテリングと自分の考えを組み合わせて、合計2分間のプレゼンテーションを行う。
- 3. 聞き手からのランダムな質問に英語で答える。質問は日本語でもかまわない。
- 4. 聞き手からコメント(良い点と改善点)をもらい、役目を交代する。

(効果)

- 1. 自分で考えて、工夫し、自己開示を行うため、生徒の自己肯定感は大いに向上する。
- 2. 生徒個人の能力に応じた学びが進められ、教科書の内容把握への意欲が向上した。
- 3. 3年生になり、長文読解に粘り強く取り組む姿勢が大いに見られた。
- 4. リスニング力が飛躍的に向上した。友人同士の学び合いが大きく関係している。

3. リスニング活動

(1) Listen & Talk

(活動の仕方)ペア活動 *目的は、相手の言っていることの概要を理解できるようになること 1. 音声を放送し、ヒントなしでメモを取り、放送終了後に互いに内容について話し合う。

2. 写真等を提示して、再度音声を聞く。マルチタスクでリスニングを行う。メモを取り直し内容について話し合う。その後、クラス全体もしくは周囲の生徒と情報を共有する。

(効果)

- 1. リスニング力だけでなく、推測力の強化につながる。
- 2. 教科書の英文解釈の時間が短くなった。楽しみながらリスニング強化に繋げられる。
- 3. メモを取る習慣ができ、絵や写真を使用するとマルチタスクへの対応力を伸ばすことができる。
- 4. 互いに補い合える凸と凹の関係を作ることができ、生徒が自信を持って学習に取り組める。

(2) Dictation

(活動の仕方) 1 文を聞いて、英文を書き取る。生徒のリクエストに応えて繰り返し行う。

- (効果) 1. 英語のスピードや音の繋がりに慣れることができ、正確に聞き取る訓練となる。
 - 2. 英単語と音とのギャップが埋まり、リーディング力育成につながった。

4. 評価について

前任の先生が残したスピーキングパスポートが非常に役に立った。活動して終わりではなく、授業内の様々な活動で達成したことをポイント化することができた。もう一つは、様々な活動の中で見取り評価を積み重ねることで、観点別評価実施への道筋ができた。

発話量は、ワードカウンターシートが有効だった。「自分自身が話している英語はどのくらいの分量なのか」「友人はどのくらい話しているのか」、それらを数値化することは、スピーキング活動だけでなく、学びのモチベーションを高める良い指標となった。単純に、何words話したのかが分かり、その変化の推移も一目で分かるため非常に効果的であった。1年生で1分間25wordsしか話せない生徒が、3年生になり70wordsを超える分量を述べられるようになり、その内容も格段に良くなった。

5. PDA即興型ディベート

私の授業のヒントは、すべてここから生まれている。「3分30秒話し続けるにはどうしたらいいのか」「分かりやすいストーリーを作るにはどうしたらいいのか」「POIをするには、POIに対応するにはどうしたらいいのか」「反駁とは何だ」など挙げたらきりがない。教員向けの研修でも散々打ちのめされ自信を失った。しかし、それ以上に希望の光を見た。全国の高校生が目を輝かせてディベートにのめり込み、新しいことを学ぼうと挑戦している。そんな勇猛果敢な姿を秋田県でも見たいと切に願っている。

「知の循環」と「自律した人間の育成」これこそが教育が目指すべき方向性である。ディベートがすべてではないが、ディベートはこの方向性に合致した取組の一つであることは間違いない。インプットとアウトプットの両方を行い、多くの仲間と切磋琢磨しあい、失敗しても学びを深められる道がディベートの中にある。その取組を少しでも広められればと思っている。

6. まとめ

角館高校に赴任して、ディベートに出会えたことは幸運だった。全国での取組は、参考になることが非常に多い。それらを活用した結果、生徒は学習者として、一人の人間として格段に成長を遂げていった。まだまだアウトプット活動の良さは浸透していないが、いずれ従来のやり方とのハイブリット型ができあがれば、生徒の成長を格段に促すことができると確信している。教員の学びの時間は非常に大切である。生徒に求められている力が変化している以上、やり方をアップデートすることは必須だと思う。これまでの実績は大切だが、積極的に捨てていこうと思う。何が起こっても不思議はない時代になったので、常に学び続けて、知の獲得、知の循環に向けて努力していきたい。

授業の中でのディベート活動の実践

~論理的な構成で意見を伝える生徒の育成を目指して~

秋田県立湯沢高等学校 教諭 菅原 透

本校は令和3年度から二年間、英語授業改善事業の拠点校として、ディベートの要素を生かした授業を実践している。ゴールを「論理的な構成で意見を伝える生徒の育成」とし、特に1年生の英語コミュニケーションIにおいて、週3時間のうち1時間をALTとのTTにあて、ディベートに特化した授業を実践してきた。本稿ではどのようにディベートを授業の中で実践し、評価しているのかを紹介したい。

1. ディベートに特化した授業の目的と下地作り

ディベートに特化した授業の目的は、以下の2点である。1つ目は、「話すための自信を持たせること」である。そのために、ディベートが非常に有効であると考えたからである。例えば、準備にかかる負担も少なく、生徒たちに人前で表現する機会を積極的に提供し、小さな成功体験や失敗体験を積ませることができる。2つ目は、「学習意欲の向上」である。今日はどのようなトピックだろうかという期待感は、意見を表現したいという生徒の心を開かせるものであると同時に、これまでとは異なる学習への刺激を醸成していくと考えるからである。

ディベート活動を行うに当たっては、次のような下地づくりも重要である。最初に、1年部の英語 科職員でディベート指導についての共通理解をもつことが必須となる。さらにディベートによる英語 の指導の目的をALTと共有すること。ALTもスピーキング活動では話すことに対する自信が必要で あるという認識を強く持っていたことが分かった。その自信をつけさせるために、ディベート活動を 通じて小さな成功体験を積み重ねることが有効であることも共通の認識となった。教員間の共通理解 は年間を通じた指導には必要不可欠な下地である。生徒にとっては、週1時間必ずディベートがある という意識が形成できたため、活動を行う上でのグルーピングやディベートの進め方などの教員の指示に対する理解もスムーズになり、意欲も高まった。

2. ディベート指導の具体的な取組

(1) ディベートのトピック (論題)

当初は教科書本文に関連したものを提示していたが、より多くの身近なトピックに触れさせたいと考え、ALTとトピックを選定した。

(2) ディベート活動の流れ

- ① 4人グループを作り、賛成・反対側のペアに分ける。
- ② ペア内で賛成または反対の理由を考えさせて、互いの主張と理由を共有させる。
- ③ 相手の主張・理由に対する反駁をペア内で考えさせて、互いの反駁を共有させる。ディベートではジャッジが必要だが、あえて勝敗をつける形にせず、英語を使い自由に意見を共有することを心がけた。

(3) ブレインストーミング

ブレインストーミングの時間を10分間設定し、キーワードやフレーズを用いて、できる限り多くのアイディアや例をワークシートに書くよう繰り返し指導した。この活動を行うことで、これまで英語で発言することに慣れていなかった生徒も、次第に自分の考えを互いに伝え合うことができるようになった。さらには、意見を交換し指摘し合うことによって、主張・理由がより深化するということに生徒自身が気付いていった。

(4) AREA (Assertion, Reason, Example, Assertion) 「型」の提示

自分たちで作り上げた主張・理由を相手に正確に分かりやすく伝えるためには、論理的に 説明することが必要であるとの気付きを生徒自身が得たため、自分の意見を述べるために必 要な「型」であるAREAを提示した。ALTに論理的に意見を述べる型のサンプルをいくつか 提示してもらい、それらを何度も口頭で練習する機会を設けた。この取組によって、多くの 生徒が自分の意見を、最初は「型」にはめて述べる習慣を形成することができたと感じてい る。

(5) 反駁につなげる指導

自分たちの主張・理由を論理的に伝えるという点では早い段階で多くの生徒に成長が見られた。しかし、生徒が最も苦手とした点は反駁である。噛み合わない反駁の要因として、① 「相手の主張・理由を十分に理解していない」ことと、② 「直接的な反駁となっていない」ことが挙げられる。

①については、聞き取れない場合は "Could you say that again?" などのフレーズを用いて、互いにやり取りを通じて主張・理由を理解するよう指導しているが、聞いた内容を整理できないという課題がある。この課題を改善するためには、聞きながらメモを取る習慣を生徒が身に付ける必要がある。しかし、メモを取るようにと伝えるだけでは、多くの生徒が文でメモを取ろうとする傾向が見られ、どうしても間に合わずに中途半端なメモとなり、相手の主張を崩すための反駁につながらなかった。

そこで、重要だと感じた英単語や語句のみメモすることや日本語を使ってもよいことにした。また、聞き取った表現を使ってリテリングする活動を適宜取り入れた。メモを取る力とそのメモを基に相手の主張・理由を理解する力の向上については、現在も指導を継続し努力しているところである。

②については、論理的思考力が大いに関係する課題である。以下のような反駁が実際に多く見られた。トピックは Instore shopping is better than online shopping.である。

You said instore shopping is better than online shopping because you can touch the items and choose the best one. However, we disagree. In online shpping, you can buy what you want anytime anywhere.

この例では「店内でのショッピングでは実際に商品を触って最も適したものを選ぶことができる」という相手の主張・理由に対して、「オンラインショッピングではいつでもどこでも欲しいものを買うことができる」という反駁となっており、主張・理由に対する直接的な反駁となっていない。ただ単に、自分たちの主張・理由を繰り返すのみで終わってしまったグループが多かった。

この点を改善する一つの方法として、英語という教科を越えて他教科とも連携し、論理的 思考力を高めていく必要がある。次年度は国語科と連携し、年間を通じて論理性を高める授 業を共同で実施する予定である。

3. ディベート活動の評価について

(1) 時期と方法

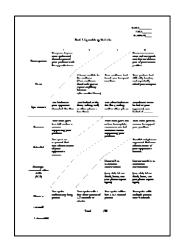
今年度はパフォーマンステストの一環としてスピーキングテストにディベートを取り入れることとし、 $1\cdot 2$ 学期末にそれぞれ1回ずつディベート活動の評価を実施した。1クラス6グループ(4人1グループ)をALTとJTE 2名の計 3名で分担して評価した。JTEはChromebookを使って録画することにより、より正確な評価となるよう心がけた。

(2) ルーブリックの活用

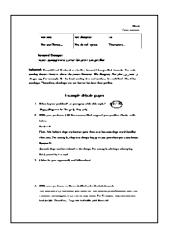
評価は、前任のALTが中心となって作成したルーブリックを 用いた。

ルーブリックの裏面に日本語に翻訳したものを載せたため、 生徒にとって評価内容が明らかとなり、自己調整を図る機会を 与えるものになった。

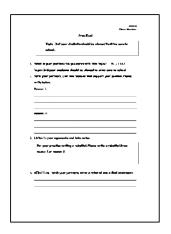
評価項目の改善点として、反駁をより適切に評価するため、 2つある主張・理由の両方に反駁できたかどうかを加えたいと 考えている。また、Strategic Communication Skills(SCS)は ディベートにおいてはあまり必要がないと思われるため、通常 のスピーキングテストと差別化を図ったルーブリックへと改善 していきたいと考えている。



現実の問題として毎授業時に個々のグループのディベート活動を教員が評価することはかなり難しい。そこで、授業のまとめの時間に、多くのグループに共通した問題点や課題を全体で共有し、次のディベート活動に生かすフィードバックを与えることを続けている。生徒自身による気付きやより深い振り返りのために、今後は生徒による自己評価や生徒同士の相互評価も取り入れていきたい。







スピーキングテスト用のディベートのための練習として生徒に配付したワークシート例

4. 成果と課題

本稿で紹介したディベート活動は一般にはマイクロディベートと呼ばれるもので、身近なテーマに 基づいて賛成・反対を明確に主張し、論理的思考力を生かして反駁するトレーニングである。

この2年間、拠点校としてディベートの授業における活用法を研究したことによって、ディベート活動は英語の4技能を高める有効な活動であると実感している。理由は、スピーキング力やリスニング力の向上はもちろんのこと、伝えるための型(AREA)を習得したことにより、特にライティングにおいて意見を論理的な構成で書くことができる生徒が増えたことが挙げられる。英語で意見を書く問題においても、1学期と2学期の生徒の解答を比較すると、明らかにAREAが意識された解答が増え、記述量も増加した。

今後の課題は、「いかに即興性を高めていくか」「データなどの論拠をどのように主張や反駁に取り入れていくか」である。課題克服に向けて、「準備時間を短縮する」「原稿を見ずに話す指導を継続する」ことを実践したい。さらに、日頃から科学技術や環境問題、社会問題など幅広いテーマについて自分の意見を論理的に書く活動を授業に多く取り入れたい。伝えるための「型」を用いてアウトプットする活動を継続し、論理的な構成で意見を伝える生徒を育成していきたい。

Find Your Partner Activity

Kaixin Chin, ALT, Oga BOE

<u>Level:</u> all levels <u>Time:</u> 15-25 minutes

Introduction:

This is a highly flexible activity that uses reading, listening, and speaking skills. This activity is used to make every student communicate with each other in a fun environment.

Target class size:

This activity is recommended for medium to large sized classes with an even number of participants. If there is an odd number of participants, please include a teacher.

Goal:

- All students will need to find their partner by asking and answering questions based on the vocabulary and grammar points that they are learning.
- Elementary school and low-level students will be able to practice and enhance their questioning and answering ability.
- High-level students will be able to practice their speaking skills and increase their ability to produce questions.

Materials:

- PowerPoint slides
- Activity cards
- 2 envelopes
- A timer

Preparation:

- PowerPoint slides to practice vocabulary, questions and answers
- Create cards
 - Make one card for each student. Make cards in pairs.
 - Print out the cards and cut them. Separate each pair into 2 separate decks.
 - Put each deck into separate envelopes.

Activity:

- 1. Use the prepared PowerPoint to practice target vocabulary and phrases with the students.
- 2. Explain the activity by demonstrating it with the homeroom teacher (HRT) or Japanese English teacher (JTE).
- 3. Each student gets a card from one of the envelopes. The students should not tell what their card is to anyone.
- 4. Check with the students to see if they can read and understand their cards.
- 5. Set the timer for 2 minutes. If the class is bigger than 28 students, or if the students have low English ability, set a longer time limit.
- 6. First, the students should stand up, find a classmate and do janken.
- 7. The winner asks the target question.
- 8. The loser answers the question by using the card that they are holding.
- 9. If both of the students have the same cards, they have "found" their partners. Then, they should go to the teachers. The teachers will check their cards by asking them the target

- question. The students answer and they can sit down.
- 10.If the students do not have the same card, they repeat Step 6 to Step 8 until they find their partner.
- 11. If there is enough time, play another round. Collect and re-distribute cards to each student. Set the timer for 1 minute and 30 seconds in the second round.

Examples:

This activity can be used to practice various grammar points.

The table below shows how to use this activity to practice different grammar points.

School/ Textbook/ Unit	Target Phrases	Exampl	e Cards
ES / NH 5 / Unit 2	Q: What do you want for your birthday? A: I want a ~.	I want a rabbit.	I want a rabbit
ES / NH 5 / Unit 3	Q: What do you want to study? A: I want to study ~. Q: What do you want to be? A: I want to be a ~.	I want to be a doctor	I want to be a doctor.
ES / NH 5 / Unit 6	Q: What would you like? A: I'd like ~.	I'd like a hamburger.	I'd like a hamburger.
ES / NH 6 / Unit 2	Q: Where do you live? A: I live in ~. Q: What do you usually do on Sundays? A: I usually ~ on Sundays.	I usually <u>watch TV</u>	I usually watch TV.
ES / NH 6 / Unit 6	Q: Where is the ~ from? A: The ~ is from ~.	Where is the beef from?	The beef is from Australia.
ES / NH 6 / Unit 7	Q: What is your best memory? A: My best memory is our ~.	My best memory is our ~.	My best memory is our ~
JHS / NH 1 / Unit 2	Q: What do you have for breakfast? A: I have ~ for breakfast. Q: How do you come to school? A: I come to school by ~. *look at Variation section, point 2	bacon and eggs	bacon and eggs
JHS / NH 1 / Unit 8	Q: Are you ~ing? A: Yes, I am. I am ~ing. *look at Variation section, point 3	Are you skiing?	I am skiing.

JHS / NH 2 / Unit 3	I use ~ to do ~. *look at Variation section, point 4	I use this pencil ~	~ to write a letter.	
JHS / NH 3 /	Q: Have you ever ~? A: Yes, I have. I have ~. (The students will need to think of	I have fought a bear.		
Unit 1				
		I have bought a BMW car.		
	the question themselves by using the card that they are holding)	I have bought a BMW car.		

Кеу:

ES = Elementary School JHS = Junior High School NH = New Horizon

Variations:

- Each student should be able to find only one partner. Let's say if there are 28 students. Teachers should create 14 matching pairs of cards. However, for class sizes larger than 30 students or with limited card ideas, you can make double pairs.
- First, introduce "breakfast around the world" and "how children get to school around the world" to the students. Use those food and transportation to make cards and do this activity.
- Instead of finding a classmate and doing janken to ask the target question, split the class into 2 teams: one is the Question team, one is the Answer team.

 The Answer team stands up. The Question team asks "What are you doing?". After that, everyone on the Answer team has to gesture simultaneously based on the card that they are holding. Then, everyone on the Question team observes and "finds" their partner by asking the target question (Are you ~?). Swap the Question and Answer teams and play another round.
- Split the class into 2 teams: one is the Object team, and another one is the Action team. Everyone stands up, the Object team students find a classmate from the Action team and say the target sentence ("I use this pencil"). If the object and the action ("to write a letter") match with each other, they have "found" their partner. Swap the Object and Action teams and play another round.
- Leave the PowerPoint on the TV / digital board, so that the students can double check the target phrases during the activity.

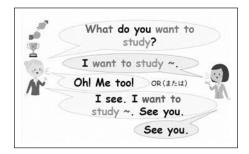


Figure 1: Example target phrases that the students should use during the activity.

This is an example from the ES 5th grade textbook (NH 5, Unit 2).

Conclusions:

This is a simple and guided activity that requires no personal answers. Students will feel comfortable and focus on practicing the target questions and answers.

How to Teach Classroom Debate

Mark Wiles, ALT, Semboku BOE

Class 1: Ideas (50 mins)

Explaining Debate (15 mins)

- Motion: A topic that says we should change something in the world.
- **Affirmative team:** Agrees with the motion.
- **Negative team:** Disagrees with the motion.
- **Judges:** Decide which team is the winner.
- Format:
 - The Affirmative team will have 1 minute to explain to the Judges why they agree with the motion. The Negative team will have 1 minute to think of an attack to the idea, and 1 minute to explain their attack to the Judges.
 - The Negative team will then have 1 minute to explain to the Judges why they disagree with the motion. The Affirmative team will have 1 minute to think of an attack to the idea, and 1 minute to explain their attack to the Judges.
 - All students will then have 2 minutes of free talk to continue debating.
 - Judges will have 2 minutes to decide which team had the best ideas, English, and energy.

Motion (10 mins)

- Introduce an interesting topic that changes something in the world. It should be something the students can talk about but not so simple that it discourages creativity or thinking.
 - > Topics like "We should not wear school uniforms" are easy to debate but also quite boring.
- Discuss the meaning of the words, give useful background information, and answer questions.

Idea Maps (20 mins)

- In groups of 2-4 people, students can think of ideas that agree and disagree with the motion. They can write short, connected notes to make an idea map.
- Remind students to think of different groups affected by the motion.
 - Students often think of just their own point of view (children, Japan, people), so help them think of others (adults, the world, companies/government/environment).
- Students can share their ideas on the blackboard or a Chromebook Jamboard.

Choosing Ideas (5 mins)

- Students will choose two ideas, one that agrees with the motion (Affirmative idea) and one that disagrees (Negative idea).
 - Students should think about which ideas are the strongest, most original, and easiest to say in English.

Class 2: Explaining (50 mins)

Speech Patterns (10 mins)

- Groups should use their two ideas from Class 1 to write an Affirmative speech and a Negative speech. Explain the two speech patterns.
- Affirmative speech pattern (+ M =)

- : Talk about a problem we have before doing the motion.
 - > "We should (motion). Now, (problem). For example, (example)."
- M: Say that the motion (M) will change the problem.
 - > "But, the motion will change this."
- : Talk about a good thing we have after doing the motion.
 - And, this is good because (*good thing*). For example, (*example*). So, we should (*motion*)."
- Negative speech pattern (+ M = ()
 - (2): Talk about a good thing we have before doing the motion.
 - We should not (motion). Now, (good thing). For example, (example)."
 - M: Say that the motion (M) will change the good thing.
 - But, the motion will change this."
 - : Talk about a problem we have after doing the motion.
 - And, this is bad because (problem). For example, (example). So, we should not (motion)."

Writing Speeches (30 mins)

- Show idea maps from Class 1 again as a reference.
- Remind students to use the English they know. Do not only use Google Translate.

Attacking (5 mins)

- Explain that, in the debates, students should listen to the other team's idea and think of problems with it. They should consider if all parts $(\textcircled{\@agray}, M,\textcircled{\@agray})$ are true.
- Remind the students that they don't need to use perfect English. One word, phrase, or gesture can be a good attack if the Judges understand it.

Preparing for Debates (5 mins)

- Explain that there will be three rounds of debates in Class 3, and that each team will have a chance to be in the Affirmative, Negative, and Judge roles.
- Groups should decide which members will read their Affirmative and Negative speeches during the debates, and which member will attack the other team's idea.
- Remind students of the time limits and assign tables and roles for each round.

Class 3: Debate (50 mins)

Preparation (5 mins)

- Confirm the table and role assignments for each team.
- Make groups of tables in the shape of a "U" (Affirmative and Negative teams on the left and right of the "U" facing each other, Judges at the bottom of the "U")
- Encourage the students to use clear ideas, easy English, and good energy.

Debate Round 1 (10 mins)

- Affirmative teams will have 1 minute to explain their idea to the Judges. Negative teams will
 have 1 minute to think of an attack to the idea, and will have 1 minute to explain their attack
 to the Judges.
- Negative teams will then have 1 minute to explain their idea to the Judges. Affirmative teams will have 1 minute to think of an attack to the idea, and will have 1 minute to explain their attack to the Judges.
- All students will then have 2 minutes of free talk to continue debating.
- Judges will have 2 minutes to decide which team had the best ideas, English, and energy.

Post-Debate Check 1 (5 mins)

- Ask the different Judge teams to quickly announce the winners to the class and how they decided (Japanese is ok here).
- Ask the students if there were any words or phrases they wanted to know how to say in English in their debates. Write the English on the blackboard for them.
- Tell the groups to move to their Round 2 tables and roles.

Debate Round 2 (10 mins)

Repeat Round 1 procedures.

Post-Debate Check 2 (5 mins)

Repeat Post-Debate Check 1 procedures.

Debate Round 3 (10 mins)

Repeat Round 1 procedures.

Post-Debate Check 3 (5 mins)

- Repeat Post-Debate Check 1 procedures.
- Move the desks back, and end the class.

Conclusions:

Education is changing. The internet has replaced teachers as the best source of knowledge, and the days of students studying infinite facts are ending. Teachers have a new, more important job ahead: helping students understand and use the limitless knowledge available to them. Debate is a fantastic way for students to create, analyze, and communicate. To think and not simply memorize. To use English, not just repeat it. For decades, students have been ordered to listen. Now, we should help them talk.

Situational Responses

Glenn Timoney, ALT, Odate Homei Senior High School

Level:

Senior High School (SHS), can also be made suitable for Junior High School (JHS)

Time:

35~40 minutes.

Goal:

Students should produce English that is suitable for the situation they are presented with.

Materials:

Digital →teacher chromebook, chromebook per student group, screen, speaker.

(not necessary but helpful) = headsets.

Physical →whiteboards, whiteboard markers, tissues, worksheet, speaker.

(not necessary but helpful)= screen, chromebook.

Role of the JTE and ALT:

JTE can explain each situation, and control the teacher's chromebook.

ALT can assist struggling groups, and judge the responses.

Preparation:

Preparation for this activity can vary. I will explain the preparation for the digital version as the physical version is essentially the same but instead of adding the situations to Jamboard, you put them on a worksheet.

Find some situations online or make your own. A useful website to use is

kiminiBB (bb.glats.online/courses/). Or you can find many more examples from books such as "絵で見てパッと言う英会話トレーニング".

Once you have selected some level-appropriate situations, create a Google Jamboard and add the images to the Jamboard, one image per slide. Finally, share the Jamboard with the class through Google Classroom.

Activity:

Divide the class into small groups of 3-4 students. Each group should have one chromebook (whiteboard, marker, tissue, worksheet). All groups will access the Jamboard through Google Classroom, at the same time, the Jamboard will be displayed on the big screen in the classroom(a larger printout of the situation can be stuck to the board for everyone to see).

If needed the situation can be explained to the students by the JTE. Students will then have 1-2 minutes to think of and write the most appropriate response to the situation in English. Students can use the sticky-note function on Jamboard to submit their responses (write the response on a whiteboard and hold it up for everyone to see).

The ALT can then check each group's responses from the big screen in the room. Correcting any mistakes, giving advice for better fluency, and finally judging the best response. After choosing the best response, move on to the next slide on the Jamboard. Each student in a group should have an opportunity to type/write out a response.

This lesson can be altered to focus on text, images, or sound files. Examples at the end.

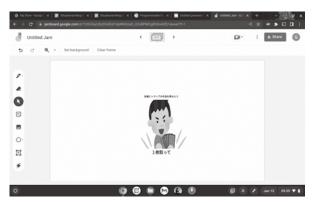
Lesson example

A picture and situation in Japanese are given to the students.

This situation is presented to the class.



The Jamboard will look like this.



The students will have a few minutes to think about how best to say it in English, then they will use the sticky-note function to show their response (hold up the whiteboard for everyone to see).



Students should add their group number so it is easy to tell who owns which response.

The ALT will examine each response and decide who gave the best or most fluent response.

At the end of each situation have the students repeat the best response after the ALT.



The class will then move on to the next slide on Jamboard and the new situation will be introduced.

At this point, a different student in each group should be responsible for typing (*writing*) the response.

Continue in this way for as long as you want the lesson to last.

Taking it one step further

If you have access to some microphones or headsets you can have the students submit their responses via speech-to-text on a Google Doc. Students will be given a situation and some time to think of a response. Then, they will go to a shared Google Doc with pre-assigned text boxes for each group to enter their response verbally. The teacher can easily show the class or copy/paste the response into the Google Jamboard.

Such a lesson can be altered to suit the need of the class.

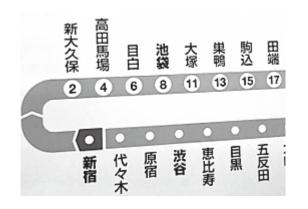
Here are some examples of what can be done.

1) A picture and situation in English are given to the students.



In this case, you would remove the Japanese explanation and replace it with an English one.

2) A picture is given and a verbal explanation will explain the situation in English.



The recording / ALT would say,

"Your friend asks you: How long will it take to get to Ikebukuro?"

3) No picture is given, only text.

Your friend calls you to ask if you are free to play today. But you have to refuse.

4) The situation is given verbally with no other information provided.



"You are on holiday in a foreign country and are asked: Where are you from?"

Collaborative Document Activity

Marie Emmanuelle Licup, ALT, Yokote Seiryo Gakuin High School

Google Spreadsheet Collaboration (Food Waste Solution in Akita)

Level: High School Time: 15 - 20 minutes

This activity is one of the possible ways to collate all the groups' ideas into one spreadsheet.

Materials: Tablet PC

Google Classroom

Google Spreadsheet

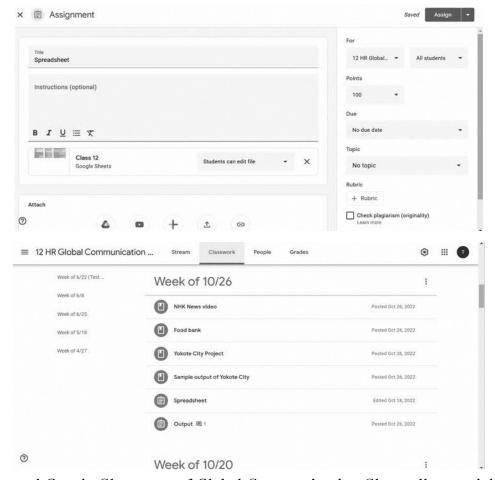
Smart TV

HDMI → Type C cable

Preparation:

- 1. Create a sheet, and type the column titles as needed. Adjust the format of the cells and text to make it easier to view when projected on the Smart TV.
- 2. Post the Spreadsheet in the Google Classroom as an Assignment and choose the Option "Students can edit the file."

(This will enable the students to access and edit the file simultaneously.)



Actual Google Classroom of Global Communication Class, all materials are categorized per week

Activity:

- 1. Show the Google Spreadsheet on the Smart TV by using the HDMI→Type C cable and present the activity of filling it in during the lesson.
- 2. Give students time to discuss their ideas before letting them use their tablet PCs. (This activity can be done individually or by group.)

If it is a group activity, it can be an option to assign roles to each member to ensure that roles are clear and goals are met.

For example:

ICT Pro → the member who will access the Spreadsheet and type the group's final ideas

Speaker → the member who will report and share the group's ideas

Leader/Facilitator → the member who will facilitate the flow of discussion and

ensure active participation by all members

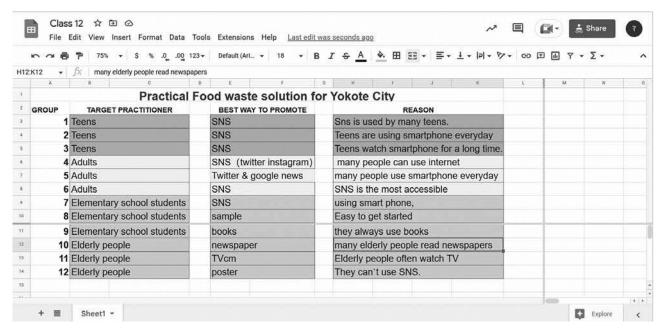
- 3. Teachers will go around the room to observe each group's discussion and help any students who need some guidance or ideas.
- 4. After 10-15 minutes, briefly explain and confirm students' understanding about their group's respective spaces. Highlight the importance of cautiousness and avoid any errors.
- 5. Let the ICT Pro access the Spreadsheet to input the group's ideas.
- 6. After the Spreadsheet has been filled up, ask the speaker from each group to report.



Photo of the Google Sheet Activity being presented to the class



Photo of the students working together to complete their Google Sheet task



Actual Output of Collated ideas from all the twelve groups of Class 12

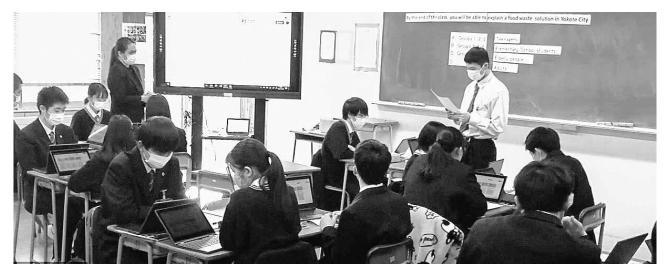


Photo of a group speaker presenting ideas while using his worksheet and the Google Sheet on the Smart TV as reference

In this lesson, the Teachers assigned the 'Target Practitioner' category to each group. Apart from that, all the other entries were autonomously inputted by the students. This activity has improved the class in various ways. First, the juxtaposition of the responses encouraged the students to think more carefully about the subject and enter varied ideas. There was evidence of students' attempt to be more original and think in a more logical way. Second, cooperation from all members has greatly improved as they can see their ideas typed in the template in real time. There was more motivation and initiative to correct the word choice, grammar, or spelling errors committed by the ICT Pro. Through communication and teamwork, productivity in class was achieved. Lastly, the leaders are more confident to present their ideas in class because they are products of a fun and inclusive digital collaboration.

Journey Through America

Stephen Beasy, ALT, Yuzawa Shohoku High School

Summary

- 1. Subject(s): ESL/EFL
- 2. Topic or Unit of Study: Cultural differences and daily conversations
- 3. Grade/Level: HS
- 4. Objective: To understand more about various places in the USA while practicing likely conversations students would experience while traveling abroad.
- **5.** Time Allotment: 30-50 minutes.

Implementation

Procedure

a. Introduction

This area could be anything ranging from a gas station (the USA version of a conbini) to the Grand Canyon. For things that are also in Japan, make sure to choose a video and/or photos that really highlight the differences.

First, play a video and show some pictures of the area of interest. Make sure to pause the video to help the students understand it and keep them engaged. This is even more important if the video is only in English and includes words they may not fully understand.

b. Direct Instruction

Tell students about this place. Any interesting points or cultural differences should be pointed out here.

Next, introduce a dialogue that students would likely engage in if they visited such a place while traveling or studying abroad. Explain new words, phrases, and any slang or regional dialects as necessary.

c. Guided Practice

Have the students practice the dialogue as you see fit. Pair reading, individual reading, having them all read together as a class, etc.

d. Check for Understanding

Verify students understand the dialogue and any important information about the destination. The next activity is a quiz, so it's important not to skip this step.

e. Independent Practice

Issue a quiz. This can be done via many mediums, but I prefer Kahoot, Blooket, or Google Forms. If the students are already in a Google Classroom, Google Forms are extremely easy to use. Kahoot is definitely the favorite and most engaging from my experience.

The content should contain not only information spoken by the teacher, but also information written on the handout. Questions about the vocabulary in the dialogue are also good. Adding questions for which the answer is not written on the handout but was spoken by the teacher is good for listening comprehension.

f. Closing

Discuss frequently missed questions from Kahoot/Form to check understanding. Allow any questions and add any necessary information.

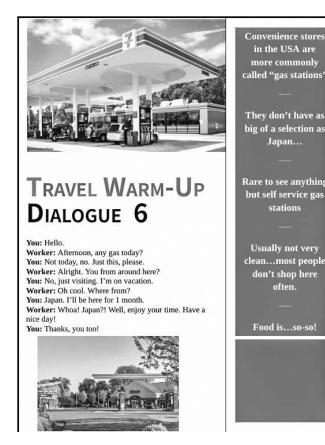
Materials & Resources

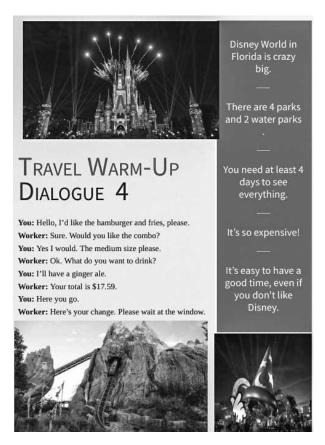
a. Instructional Materials:

Some kind of document for the students to look at that contains the dialogue. Distribute it to the students via Google Classroom, paper handouts, or by showing them on the smartboard.

Also, videos/photos you will show. I prefer to just bookmark tabs and open them on the smartboard because it's much easier to prepare but paper prints of photos could also work.

b. Resources: YouTube, Kahoot/Google Forms/Blooket.





Examples/Additional Information

Here, I will attach a few images of the kind of document I used to show the dialogue. Keep in mind, this can be done however you desire.

I considered adding some screenshots of Kahoot, but as the website can be used in Japanese (among many other languages), I feel that it isn't necessary. The website is quite intuitive to use. A Japanese tutorial is available on YouTube:

Kahoot!(カフート)初めてでも分かる作り方・使い方【Kahoot!Tutorial】

https://www.YouTube.com/watch?v=0cwHbfBPWnk

You should create an account, and then create a Kahoot. The free features are plenty. Premium paid services are NOT required to make this fun in class.

Google Forms is also quite intuitive to use and available in Japanese.

A final note about this lesson:

I find it works best when it's done often. Weekly or bi-weekly is best. The students can have a similar experience to traveling as they are learning about a new place and practicing new dialogue as if they were truly abroad.

Student's Improvement:

This activity was done for multiple months with students of various grade levels. As their experience with the activity grew, they became more comfortable with the vocabulary and speed necessary to converse in English with service workers.

After some time, students were excited to recommend the next destination we could visit. I noticed a clear increase in their willingness to speak English with me in front of their classmates and also in their comprehension speed. When utilizing the vocabulary we reviewed, I was able to speak at a near native speed while still being mostly understood by the students. My challenge to practice at "native speed" in front of the class was also met by a few brave students.

Students also reported to me that they felt much more comfortable with things like taking public transport and necessary daily conversations in an English speaking environment.

英語科「英語コミュニケーション | 」 学習指導案(例)

実施日時:令和○年○○月○○日(○)○校時

場 所: ○年○組教室 対 象: ○年○組 授業者: ○○ ○○ A L T: ○○○○

教 科 書:○○ ○○○ (○○○)

1 単元名 Lesson 3 Plastic Pollution in Oceans

2 単元の目標

海洋ごみの問題について、聞いたり読んだりしたことを基に、自分の考えを理由とともに聞き手に分かりやすく話して伝えることができる。

3 単元と関連するCAN-DO形式での学習到達目標

社会的な話題について、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えることができる。 【GRADE 5 話すこと「発表]】

4 単元の評価規準

思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞き手に自分の考えをよく理解して	聞き手に自分の考えをよく理解して
もらえるように、海洋ごみの問題に	もらえるように、海洋ごみの問題に
ついての情報や考えを、聞いたり読	ついての情報や考えを、聞いたり読
んだりしたことを基に、理由ととも	んだりしたことを基に、理由ととも
に話して伝えている。	に話して伝えようとしている。
	聞き手に自分の考えをよく理解して もらえるように、海洋ごみの問題に ついての情報や考えを、聞いたり読 んだりしたことを基に、理由ととも

5 単元観

本単元は、海洋ごみの問題に関する説明文を聞いたり、読んだりすることで、海洋ごみの問題を解決するために自分ができる取組について考え、環境問題について理解を深めていく内容となっている。扱われている言語材料は現在分詞、過去分詞の後置修飾であり、関連する領域別項目は「話すこと [発表]」とする。ペアやグループで伝え合う活動を通して、新たな情報やものの考え方を得たり、整理したりすることで、海洋ごみ問題の解決策について多面的・多角的に考える機会とする。

6 生徒観

日頃から帯活動で「話すこと [やり取り]」を伴う言語活動を取り入れていることもあり、簡単な語句や表現を用いて積極的にペア活動に取り組む生徒が多い。一方で、情報や考え、気持ちなどを整理して、聞き手に分かりやすく伝えることに不慣れな生徒も多く見られる。本単元では、発表に向けた支援等を通して、情報を整理し、相手の興味・関心を引きながら、分かりやすく伝える力を育成していきたい。

7 単元の指導と評価の計画(総時数:7時間)

主な言語活動等(◎本時の内容)	評価
・説明文を読む前に、海洋ごみの問題について知っていることを、ペアやグルー	
プで共有する。	・活動の観察
・説明文を読み、海洋ごみの問題に関する課題やその解決策をメモする。	・録画の記録
◎読み取った内容に関する自分の考えを、ペアでメモを参考に話して伝える。	・パフォーマンステスト
・海洋ごみの問題を解決するために自分ができる取組について考え、ペアやグ	(後日)
ループで伝え合う。聞き手は疑問点などを質問する。	

8 本時の学習(本時5/7)

(1) 目標

海洋ごみの問題やその解決策について、情報を整理しながら、分かりやすく伝え合うことがで きる。

(2) 本時の展開

学習活動	教師の支援及び留意点		
○Warm up 「Who is in trouble because of ocean debris?」について、 ペアで伝え合う。	○海洋ごみの問題を身近に感じることができるように、電子黒板で問題に関する写真を複数枚提示する。		
○その後Google Jamboardを用いて、海洋ごみによって困っている人や動物についての情報を全体で共有する。	○海洋ごみの問題について情報を整理、共有できるように、 4つの視点を提示する。		
	[4つの視点] ① どの地域の ② 誰 (何) が ③ どのように困っているか ④ 解決策は何か		
○本時の学習課題を確認する。			
Express your solution to ocean debris to your pa	rtner.		
○写真とキーワードを使いGoogle Slideに表す。	○4つの視点で整理しスライドにまとめるよう意識させる。		
○ペアを替えながらプレゼン練習を行い、最後のプレゼンをタブレットに録画する。	○内容や表現について、個別に支援したり、全体で共有したりする。		
○互いの内容について質問し合ったり、内容や表現について助言し合ったりする。	(評価) 海洋ごみの問題やその解決策について、情報を整理しながら、分かりやすく伝え合っている/伝え合おうとしている。(活動の観察) 【思考・判断・表現/主体的に学習に取り組む態度】		
○自校のルーブリックに基づいて、自己評価を行う。○次時の見通しをもつ。	○全体で共有したい内容や表現などについてフィードバックする。		
	○個々に事前準備や練習ができるように、次時の活動について説明する。		
	「Who is in trouble because of ocean debris?」について、ベアで伝え合う。 ○その後Google Jamboardを用いて、海洋ごみによって困っている人や動物についての情報を全体で共有する。 ○本時の学習課題を確認する。 Express your solution to ocean debris to your pa ○写真とキーワードを使いGoogle Slideに表す。 ○ペアを替えながらプレゼン練習を行い、最後のプレゼンをタブレットに録画する。 ○互いの内容について質問し合ったり、内容や表現について助言し合ったりする。		

※本学習指導案は、一例です。自校の実態に合わせてご活用ください。

AKITA Learning Targets: 'CAN-DO List' あきた型学習到達目標リスト [CAN-DO形式] 2023

<高等学校卒業時の学習到達目標>「英語を用いて、幅広い話題についての情報や考えなどを的確に把握したり、適切に表現したり、伝え合ったりするとともに、ふるさと秋田の魅力を世界に向けて積極的に発信することができる。」 **<中学校卒業時の学習到達目標>** 「英語を用いて、自分の住んでいる地域を含めた日常的な話題や社会的な話題等について、話し手や書き手の意向などを理解したり、自分の考えなどを話したり書いたりすることができる。」 **<小学校卒業時の学習到達目標>** 「基本的な語句や表現を用いて、身近で簡単な事柄について自分の考えや気持ちなどを表現したり、相手や他者に配慮しながら質問したり答えたりして、伝え合うことができる。」

	小学校		中 学 校			高等学校	
	GRADE 1	GRADE 2	GRADE 3	GRADE 4	GRADE 5	GRADE 6	GRADE 7
聞くこと	□ゆっくりはっきりと話されれば、身近で簡単な事柄について、簡単な語句や具体的な情報を聞き取ることができる。 【評価】行動の観察 ワークシート	□はっきりと話されれば、身の回りの出来事に 関する話題について、必要な情報を理解する ことができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト	□はっきりと話されれば、日常的な話題について、話の概要を捉えることができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト	□はっきりと話されれば、社会的な話題について、短い説明の要点を捉えることができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト	□日常的な話題について、必要な情報を聞き取り、話し手の意図を把握することができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト	□日常的な話題について、必要な情報を聞き取り、話の展開や話し手の意図を把握することができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト	□日常的な話題について、必要な情報を聞き取り、話の展開や話し手の意図を的確に把握することができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト
	□ゆっくりはっきりと話されれば、日常生活に 関する身近で簡単な事柄について、短い話の 概要を理解できる。 【評価】行動の観察 ワークシート	□はっきりと話されれば、日常的な話題について、必要となる基本的な情報を聞き取ることができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト	□短いスピーチ等を聞いて、全体のおおまかな 内容を捉えることができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト	□一つの話題に沿って話される内容を聞き、話 し手が最も伝えたいことを判断して捉えるこ とができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト	□社会的な話題について、必要な情報を聞き取り、概要や要点を目的に応じて捉えることができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト	□社会的な話題について、必要な情報を聞き取り、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト	□社会的な話題について、話の展開に注意しながら必要な情報を聞き取り、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができる。 【評価】活動の観察 リスニングテスト
読む	を発音することができる。 【評価】行動の観察 ワークシート	□日常的な話題について、簡単な英文や語句で書かれたものから、目的や状況に応じて必要な情報を読み取ることができる。 【評価】ワークシート 定期テスト	□短い物語やEメール、伝言等を読んで、書き 手の意向や要点を捉えることができる。 【評価】ワークシート 定期テスト	□簡単な語句で書かれた社会的な話題について の説明や物語、対話文を読んで、書き手の意 向や要点を捉えることができる。 【評価】ワークシート 定期テスト	□日常的な話題について、必要な情報を読み取り、書き手の意図を把握することができる。 【評価】ワークシート 定期考査	□日常的な話題について、必要な情報を読み取り、文章の展開や書き手の意図を把握することができる。 【評価】ワークシート 定期考査	□日常的な話題について、必要な情報を読み取り、文章の展開や書き手の意図を的確に把握することができる。 【評価】ワークシート 定期考査
اکاک	□日常生活に関する身近で簡単な事柄を内容とする掲示やパンフレットなどについて、視覚的な情報を参考にしながら情報を得ることができる。 【評価】行動の観察 ワークシート	□身近な人や物についての簡単な英文を読み、 内容を理解することができる。 【評価】ワークシート 定期テスト	□簡単な物語や説明について、情報を読み取り、 話の展開を理解することができる。 【評価】ワークシート 定期テスト	□社会的な話題について、イラストや写真、図表などを参考にしながら、話の内容を理解することができる。 【評価】ワークシート 定期テスト	□社会的な話題について、必要な情報を読み取り、概要や要点を目的に応じて捉えることができる。 【評価】ワークシート 定期考査	□社会的な話題について、必要な情報を読み取り、概要や要点、詳細を目的に応じて捉えることができる。 【評価】ワークシート 定期考査	
話すこと[□基本的な表現を用いて指示や依頼をしたり、 それらに応じたりすることができる。 【評価】行動の観察 インタビュー □自分や相手のこと及び身の回りのことについ	□自分のことや身の回りの出来事について、既 習事項を用いて簡単な質疑応答をすることが できる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト	□関心のある事柄について、既習事項を用いて 簡単な質疑応答をすることができる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト □日常的な話題について、聞き返しやつなぎ言	□日常的な話題について、簡単な語句や文を用いて、即興で情報や意見とその理由を述べ合うことができる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト	□日常的な話題について、情報や考え、気持ちなどを話して伝え合うやり取りを続けることができる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト	□日常的な話題について、情報や考え、気持ちなどを詳しく話して伝え合うやり取りを続けることができる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト	□日常的な話題について、情報や考え、気持ちなどを詳しく話して伝え合うやり取りを続け、 会話を発展させることができる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト
「やり取り」		□関心のある事柄について、簡単な語句を用いて、即興で情報や意見を述べ合うことができる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト	□ 日常的な品越について、同さ返しやつなさ言葉などを用いて、即興で簡単な会話を継続することができる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト	□社会的な話題について、聞いたり読んだりし て得た情報を基に、簡単な英語を用いて意見 を述べ合うことができる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト	□社会的な話題について、情報や考え、気持ち などを論理性に注意して話して伝え合うこと ができる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト	□社会的な話題について、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話して伝え合うことができる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト	□社会的な話題について、情報や考え、課題の解決策などを論理的に詳しく話して伝え合うことができる。 【評価】活動の観察 インタビューテスト
話すこと	□自分のことや身の回りのことについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができる。 【評価】行動の観察 スピーチ	□自分のことや身の回りの出来事について、簡単な語句や文を用いて、即興で話すことができる。 【評価】活動の観察 スピーチ	□関心のある事柄について、考えや事実を示しながら、複数の文を用いて即興で話すことができる。 【評価】活動の観察 スピーチ	□日常的な話題について、メモやキーワードを 頼りにしながら、まとまりのある内容を話す ことができる。【評価】活動の観察 スピーチ	□日常的な話題について、情報や考え、気持ち などを論理性に注意して話して伝えることが できる。 【評価】スピーチ プレゼンテーション	□日常的な話題について、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話して伝えることができる。 【評価】スピーチ プレゼンテーション	□日常的な話題について、情報や考え、気持ち などを論理的に詳しく話して伝えることがで きる。 【評価】スピーチ プレゼンテーション
[発表]	□日常生活に関する身近で簡単な事柄について、 伝えようとする内容を整理した上で、自分の 考えや気持ちなどを話すことができる。 【評価】行動の観察 スピーチ		□日常的な話題について、自分の意見やその理由を、簡単な表現を用いて、テーマに沿って話すことができる。 【評価】スピーチ プレゼンテーション	□社会的な話題について、自分なりの意見や感想をその理由を交えながら話すことができる。 【評価】スピーチ プレゼンテーション	□社会的な話題について、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して話して伝えることができる。【評価】スピーチ プレゼンテーション	□社会的な話題について、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して詳しく話して伝えることができる。【評価】スピーチ プレゼンテーション	
書く	□アルファベットの大文字と小文字を活字体で書くことができる。 【評価】行動の観察 ワークシート	□自分のことや身近な人などに関することについて、簡単な語句や文を用いて書くことができる。 【評価】ワークシート 定期テスト		□日常的な話題について、文章構成の特徴を意識しながら、まとまりのある文章を書くことができる。【評価】ワークシート 定期テスト	□日常的な話題について、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができる。 【評価】ワークシート 定期考査	□日常的な話題について、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができる。 【評価】ワークシート 定期考査	□日常的な話題について、情報や考え、気持ちなどを複数の段落から成る文章で論理的に詳しく書いて伝えることができる。 【評価】ワークシート 定期考査
322	□音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本 的な表現を用いて、語順や語と語の区切りに 注意して書き写したり、例文を参考にして書 いたりすることができる。 【評価】行動の観察 ワークシート	□関心のある事柄について、既習事項を用いて、 つながりのある文章を書くことができる。 【評価】ワークシート 定期テスト	□日常的な話題や関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて、自分の考えや気持ちなどを書くことができる。 【評価】ワークシート 定期テスト	□社会的な話題について、聞いたり読んだりして得た情報を基に、簡単な語句や表現を用いて、自分の意見や感想を書くことができる。 【評価】ワークシート 定期テスト	□社会的な話題について、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して文章を書いて伝えることができる。 【評価】ワークシート 定期考査	□社会的な話題について、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して複数の段落から成る文章で詳しく書いて伝えることができる。 【評価】ワークシート 定期考査	